國語

女子用

七

46
810
B13

42422

教科書文庫

4
810
42-1938
20000
66892

S.13
1938

資料室

昭和十三年二十五月日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

國語

女子用

岩波編輯部編

岩波書店刊

廣島大學
教
66892
圖書

46
810
昭13

國語　女子用　卷七　目次

一　道……芳賀矢一……一
二　水屋の働……奥田正造……九
三　歌の響……島木赤彦……一七
四　梢の花……西行　源實朝……二七
五　遊ぶ子供……（梁塵祕抄）……三〇
六　物語論……本居宣長……三三
七　有王……（平家物語）……三八

八　安井夫人……森　鷗外……五一
九　隨筆の說……五十嵐　力……六八
一〇　桃の木……清少納言……七三
一一　あこがれ……菅原孝標の女……七八
一二　星月夜……建禮門院右京太夫……八八
一三　よき人……吉田兼好……九二
一四　苔清水……松尾芭蕉……九八
一五　深　穩……阿部次郎……一〇〇
一六　俚諺論……大西　祝……一〇五
一七　詩の鑑賞……萩原朔太郎……一一四

一八　望鄕五月歌……佐藤春夫……一二四
一九　寫生と傳統……平福百穗……一二九
二〇　廣重の畫……內田　實……一三六
二一　花……岡倉覺三……一四〇
二二　山城道……一五三
二三　爐の火……柳田國男……一五六

芳賀矢一
國文學者
文學博士
東京帝國大學
教授
帝國學士院會
員
昭和二年歿
年六十一

國語　女子用　卷七

一道

芳賀矢一

昔、刀鍛冶が刀を鍛錬する時は一心不亂であつた。精進潔齋、一切の邪念を棄てて、神明に感通するまで心を籠め、思を凝らした。さういふ至誠と集中があつて、始めて武士の魂とするにふさはしい名刀は鍛へ出されたのである。しかし、これはひとり刀劍鍛錬の上のみではなく、萬事此の境に到らなくては、到底其の奥義は極められない。我々の祖先は、何事にまれ、一事を修めようとするに當つては、實に此の覺悟と決心と

をもつて刻苦し勉勵したのである。

これは、古來すべての藝術に、道といふ語が用ひられてゐることによつても明らかである。

道とは、神道・儒道・佛道等の語に於ける如く、人の依るべき所の意で、道德的な意味が主となつてゐて、單なる術とは違ふ。劍術・弓術・馬術などといへば、單に其の技術をいふのであるが、其の極意・奧義をいふ場合には、必ず劍道といひ、弓馬の道といふ。昔は、和歌を學ぶ人は、歌道を學べば直ちに極樂往生が出來るとまで信じた。それ故、名歌を得られるやうにと住吉明神に

一矢賀芳

住吉明神
住吉神社
大阪市住吉區住吉町に在る官幣大社
祭神表筒男命外三座
和歌三神の一

參籠したことなどは、決して珍しくない。歌道は又、日本固有の道であるといふ所から、敷島の道、葦原の道などとも名づけられたのである。其の他、書法を書道といひ、茶の湯を茶道といひ、更に香のやうな末技までも香道といつた。音樂はもとより、活花でも、蹴鞠でも、投扇でも、すべて道として尊んでゐる。

藝術は指の先や手の先で唯其の技術を練習するだけでも、勿論或程度までは上達出來るが、それは畢竟生命のない技術に過ぎない。眞の上手になり、奧義を究めるには、心がこれと融合しなければならぬ、一心不亂、其の藝術に專らにならなければならぬ。碁を打つ人でも、碁の外には何も考へないやうにならなければ、上手にはなれぬといふ。碁などはもとより一種の遊戯に過ぎないから、普通の人が其の爲に一切を放擲

するのは考へものだが、碁や將棋の樣な遊戯に於てさへ、專門家になるには、それだけの覺悟がなくてはならないといふのである。言ひ換へて見れば、何の業もすべて精神を打ちこまねばならぬといふのである。しかも其の精神たるや、道德に合して非難する所のない、立派な精神でなくてはならぬ。

凡そ、人の趣味・性格は必ず其の動作・技能の端にまであらはれるもので、人の筆蹟を見れば其の人物がわかるとは一般にいはれてゐる所である。まして詩歌等の作品の上にあらはれるのは勿論で、歩き方や靴の減り方からさへ、人物を見分けることが出來るといふ人がある。かくの如く、如何なる技藝・藝術にも、其の人の性格があらはれるものであるから、其の技藝・藝術の極致に到らうとするには、上に敍べたやうに、一切の

邪念を棄てて、精進潔齋の心でこれに當らなければならぬのは、蓋し當然の事であらう。茲に至つて、智と德とは合一する。といつても、智から德が出るのではなくて、德がなければ眞の智には達せられぬといふのである。此の意味を以て見れば、我等の祖先が小さい藝能までも道と稱し、又其の道の師を同時に人間の師として尊んだことが、甚だ意味深いことに思はれる。

今日の普通教育に於ては、種々の教科目を立て、其の中、修身科以外の科目は單なる知識・技能の修得を目的とするかのやうに考へられてゐるが、これは甚だ誤つた考であつて、教育の本義は、やはりすべてを修行として一貫することでなければならぬ。いはゆる道が一切の根柢をなすのでなければなら

ぬ。人間としての根柢を鍛へ、性格を練り磨くことと、知識・技能を開發させることとが、二つであつてはならぬ。知識・技能を磨くことによつて人間を磨き、人間を向上させることによつて知識・技能を進めてゆくのである。又、高等教育に於て專門の學業を修めるにも、其の學業をあくまで自分の道と考へ、一身を捧げて之に當らなければ、到底其の蘊奥には達し得られないであらう。學者も、藝術家も、皆それ〴〵の學問・藝術を尊び、これに仕へる心でなければならぬ。然るに、動もすればこれを單なる方便と考へ、其の結果、自らも頭の人、手先の人となるのに甘んじてゐる人々があるが、これは學問・藝術の第一義を忘れたもので、學問の人たり、藝術の人たる資格のないものである。

元來、修行といふことは竝大抵の事ではない。それで古人は、修行には何より勉強が大切であると信じてゐた。今は勉強といふ語が非常に安價に使はれて、一時間位讀書しても、今日は一時間勉強したなどといふ。一時間の讀書が果して勉強といへるであらうか。古人の勉強はさういふやさしいものではなかつた。彼等は學問・藝術を道として神聖視したので、其の道を得る爲には眞に骨身を削るやうな刻苦をしたのである。例へば、かの寒稽古を見よ。人が衣を重ね、褥を厚くして寒さを凌ぐ嚴冬の朝、稽古著一枚で、火の氣も無い道場に、平素よりも激しい稽古をする。寒ければ火鉢を入れ、ストーヴを焚くといふ今日の勉強振りとは非常に違つたものである。しかし、かく寒中朝早く起きて劍術を學び、柔術を學んだ

所で、術其のものが短時日の間にさう際立つて上達するといふわけではない。むしろ、寒苦を忍んで勉めるといふことに重要な意義が存したので、修行の容易ならぬことを悟つて、これに對する覺悟・態度を確かにする所以であつた。換言すれば、寒暑に負けず、困苦に打克つて、目ざす道一つに集中し精進しようとする熱心と氣力を鼓舞する所に目的があつたのである。そして、此の熱心と氣力こそ、あらゆる學問・藝術を道として成就させる原動力であつたのである。

我々は、我々の祖先がかくの如く、一藝を學ぶにも常に道として其の修行に志し、不惜身命（ふしやくしんみやう）の覺悟を以て志業の大成を期したことを、新に考へてみなければならぬ。

（日本人）

奥田正造
教育家
東京成蹊高等女學校長
明治十七年生
喫茶餘錄

二　水屋の働

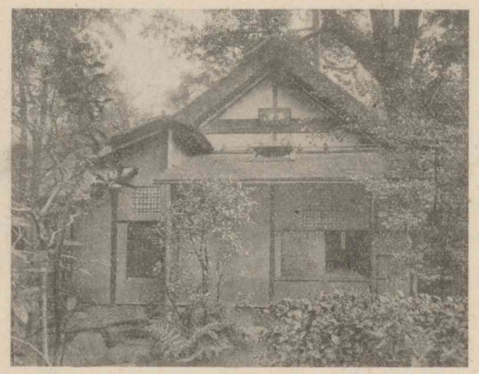
奥田正造

「喫茶餘錄」に「茶の湯すぎて和らぐ時にこそ上手下手はあれ」というてある。茶をたてる間は、大事に思ふ心の張によつて麁相はないが、道具を水屋に取入れて、心に弛が生ずる時に過ち易い。水屋の清は客前の清であり、客前の敬は水屋の敬であらねばならぬ。

水屋の働は、清と敬とを第一とする。これを趣に出すものは水屋飾で、これを働に出すものは洗である。水屋飾とは、水屋の棚の飾附のことである。輕きは上に、重きは下に、乾きたるを上に、潤ひたるを下に、器物の安定を專らとして、下は淺くとも、上は奥深く置くのを習とする。洗には水を惜しまず、し

かも、その水を粗末にしてはならない。「水を惜しみて水を惜しまず」といふを法とする。

總べての茶器を洗ひ清めて飾りつけるより、再び洗ひ清めて元の如くに片附けるまで、この清淨を外にして水屋の働はない。



（表千家茶室）　祖堂

水屋でする用意を、仕込といふ。棗や茶入には、盛砂のやうに茶を山形に仕込むのがよいとせられてゐる。これを盛るには、客に見える見えぬにかゝはらず、我が心に滿足するまで、正しくきれいに入れる。これが敬である。茶杓の柄のぬけぬやう、竹の蓋置の割れぬやう、豫め水につけて置くのも敬の働に外ならない。又、膳につけた箸・串等の潤は、洗ひ上げた主人の心入を偲ばせて、心地よきものである。水指に水を入れ、茶碗に茶巾・茶筌・茶杓を仕込み、建水に蓋置・柄杓を仕込む等、その何れにも敬と清とが籠らねばならぬ。これが、仕込の要である。

茶席で饗する食事を懷石といふ。懷石とは、溫石を懷にして寒さを凌ぐの意で、唯、飢を醫すれば足るの義である。故に、懷石には太牢の珍味を竝べる必要はない。一汁一菜で十分である。一體、馳走とは材料の如何をいふのではない。これを作りこれをすゝめんが爲に主人が奔走するの謂であつて、主人自らこれを作り、自らこれを運んで客に供するのが、眞の馳走である。

道元禪師
俗姓久我
我が國曹洞宗の開祖
建長五年（一九一三）歿年五十四

これを作るには、道元禪師の教へられた如く、喜・老・大の三心を以てせねばならぬ。喜心とは、喜悅心である。喜びてなすの謂である。今我が作る所のものが、客の聖胎を養ひ、道芽を長ずる所以であると觀ずるとき、我知らず心の底から涌き出づる歡喜の心である。老心とは、老婆親切の心である。聖胎を養ひ、道芽を長ぜしむるものなるが故に、一粒の米もこれを疎かにすることなく、一莖の菜もこれを忽にすることのない心である。大心とは、物を追うて心を變ぜず、人によつて思を改めず、大山の高く大きく、大海の廣く深きが如

水屋（官休庵）

典座教訓
永平清規中の一篇
嘉禎三年（一八九七）成る
道元著

く、偏なく黨なきの心である。この三心の運用によつて作り上げられた一汁一菜こそ、眞に貴ぶべき馳走である。徒らに材料の珍しきを選び、その調理に奇を弄するには及ばぬ。唯、その配合や火加減に心を籠め、物の眞味を損ぜぬやう、苦・酸・甘・辛・鹹の五味がよく調和せられ、輕・軟・淨潔・如法作の三德を具へれば申分はない。

「典座教訓」に、「典座は絆を以て道心となす」といはれてある。典座とは、僧堂で料理番のことをいふのである。絆とは、襷のことであるが、また煩瑣なる仕事の意味をも含んでゐる。絆を以て道心と觀じ、絆によつて道心が養はれると喜ぶ心は、やがて水屋に働く主人の心でなければならぬ。材料の精選、用具の使用、共に淨潔・如法であり、客も亦、凡眼を以て見ず、凡情を

以て察せず、常の食物なれども、常の食物とせぬ所に、主客相和の敬が籠る。この心を材料に移せば、材料に對する敬である。高大無邊なる自然の力、天地の恩、及び幾多の人々の勞苦に想ひ到る時、一粒一莖をも粗末にしてはならないと氣がついて、「これを護惜(ごしやく)すること眼睛の如くせよ」といふ戒めがしみ〳〵尊く感ぜられる。

主人は客に奉ずるを知つて貧を憂へず、唯眞實心・敬重心を以てこれに對する。これが主人振である。所謂多虛(たこ)は少實に如かず」である。土井利勝、一日、庵を拂つて客を招いた。客は定刻に參邸した。主人利勝は、慇懃にこれを迎へ、庵に導き、蕎麥饅頭十ばかりを入れた重箱を出した後、自ら茶をすゝめ、閑談時を移して會を終へた。茶會はそれで十分である。

土井利勝　下總國（茨城縣）古河藩主　德川幕府大老　正保元年（一三〇四）歿　年七十二

宗啓が利休の日記を拔書きして、その校閲を乞うた時「每會の中、品かはりたるばかりを御書き拔き候こと、心を得ず候。面上にて御思慮承るべく候。吳々相替ることなく、日々同事ばかりの內、心の働は引きかへ〳〵、何樣にもこれあるべく、所作・飾・置合はせの珍しきことは、快からざる會にて候」と奧書きして返した。「同事ばかりの內、心の働は引きかへ〳〵」とは貴い教である。これこそ貴賤・貧富によつて別なき水屋の働である。

主人の敬に對して、客も亦、敬を忘れてはならぬ。これが卽ち客振である。客は、第一に、主人の馳走振に眼をつけ、材料や調味よりもその心盡くしの眞味を味はふべきである。第二には、自己の姿に心をそゝぎ、賤しき食ひ樣をなさず、時宜の挨

宗啓　南宗寺宗慶　茶人　利休の門人　南坊流の祖　南坊錄の筆錄者

利休　千利休　名は宗易　茶人　千家流茶道の祖　和泉國（大阪府）の人　天正十九年（一二五一）歿　年七十一

拶を忘れず、一々の動作を敬の現れたらしめなくてはならない。食事に際しての作法は、唯、客たるが爲に學ぶの要があるのではなく、日々三度の食を人間らしく攝り得んが爲である。

臺所の仕事は、決して低い仕事ではない。道念を長じ、聖胎を養ふの源こゝにありと覺れば、その意義は重く且大きい。さうして、この仕事を深い意味の世界に導いて、眞に價値あらしめるものはこの三心である。親をしてその壽を完うさせる子の心盡くしも茲にあり、夫をしてその天職を果させる妻の心盡くしも茲にあり、又我が子をしてその大志を貫徹させる母の心盡くしも茲にある。

（茶味）

三　歌の響

島木赤彦

島木赤彦
本名久保田俊彦
歌人
大正十五年歿
年五十一

短歌に於ける表現は、單に言語の意味の上に現れて、それで足りるとすることは出來ません。表現しようとする感動が、各語の響や、それを聯ねた全體の節奏の上に現れて、始めて一首の生命を持ち得るのであります。歌の言語の響・節奏、これを歌の調べ・調子、若しくは聲調・格調といひます。

我々の感動は、伸び〳〵と働く場合、ゆる〳〵と働く場合、切迫して働く場合、沈潛して働く場合といふやうに、箇々の感動に皆特殊の調子があります。その調子が、宛らに歌の言語の響や全體の節奏に現れて、始めて表現上の要求が充たされるのであります。この調子の現れは、意味の現れと相軒輊する

柿本人麿歌集　柿本朝臣人麿之歌集　萬葉集中に名の見える歌集今は傳はらない

弓月が嶽　現奈良縣磯城郡纒向村に在る卷向山の一峯

萬葉集　二十卷　奈良時代に成つた歌集　撰者未詳

ところのないほど、短歌表現上の重要な要素になるのでありまして、古來よりの秀作は皆、歌の調子が作者感動の調子と快適に合つてゐるために、永久の生命を持つほどの力となつてゐるのであります。

例へば、柿本人麿歌集中にあるといふ

あしびきの山川の瀬の鳴るなべに弓月が嶽に
雲立ちわたる　萬葉集卷七

の歌について言ひましても、「山川の瀬の鳴るなべに」と一氣に進んで第四句を呼び起すところに、生動の趣を生ずるのでありまして、この「なべに」といふ濁音を含んだ第三句が、第四句二箇の濁音と相俟つて、山川の景情生動の趣をなしてゐる勢は、之を他の如何なる句法を以てしても換へることの出來ないものでありませう。これは勿論、「なべに」の持つ意味より來る力もあるのでありますが、響から來る力と、その響の全體の節奏に及す影響が大きいのであります。殊に、第一・二句に於ける「の」の疊用を受けて「鳴るなべに」と押進んで行く勢を想ふべきであります。第四・五句は、之に對して更に非常の力を以てすわつてゐるのでありまして、金剛力を以て前句を受け且結んでゐるといふ概があります。この力も、主として調子の上に現れてゐるのでありまして、第五句二五音が、主として力の中心となつてゐます。試みに、第五句を「雲ぞ立つなる」「白雲立つも」などの三四音・四三音としたらどうでありませう。歌の力が滅茶々々に碎けてしまふでありませう。歌の命が內容や材料になくて、調子にあることが分かります。この歌は實

人麿　柿本人麿　歌人　持統天皇の御代頃の廷臣
吉野　吉野山　現奈良縣吉野郡の南部に横たはる大峯山脈の一支脈
象山　現同郡中莊村に在る山部赤人　歌人　奈良時代初期の官人

に、山河自然の景物に對して作者の心中に動いた寂寥感が、徹底して一首の調子に現れてゐるのでありまして、かやうな歌によつて歌の調子を會得することは、爲になると思ひます。

これは多分人麿の歌でありませう。

み吉野の象山のまの木ぬれにはここだもさわぐ鳥の聲かも　萬葉集卷六

これは山部赤人の歌であります。「山のま」は「山の際」、「木ぬれ」は「木の末」、「ここだ」は「許多」の意であります。この歌、山河自然の風物に對してゐる境地が、前の人麿の「あしびきの山川の瀨の」の歌によく肖てゐるのみならず、「み吉野の象山のまの」と、「の」を疊用して初句を起してゐる手法までもよく肖てゐるのでありますが、第三句以下に至つて、全く前者と異なる感動を現すに至つてゐます。これは、前の人麿の歌の、第四句に至つて突然山の名を提示し來つた勢に比して、「み吉野の象山のまの木ぬれには」と呼びかけた句法が、直ちに第四句以下と相聯つて、一首を直線的に押進めてゐるからでありまして、「ここだもさわぐ鳥の聲かも」の四三音・三四音の諧調が、人麿の「弓月が嶽に雲立ちわたる」の七音・二五音の諧調とおのづから別趣の勢をなしてゐます。

柿本人麿（藤原千春筆）

人麿のあの歌は、人麿の雄渾な性格に徹して、おのづから人生の寂寥處に入つてゐます。赤人のこの歌は、赤人の沈潛した靜肅な性格に徹して、同じく

人生の寂寥處に入つてゐます。入つてゐる所は同じであつても、感動の相は個性の異なるがまゝに異なつてゐるのでありまして、それが自然に歌の調子に現れるのであります。尚、この赤人の歌で、上句を受ける第四・五句に重々しい響を持つた詞の多いといふことが、讀者の感動を異常な所に誘つて行く力になつてゐることを注意すべきであらうと思ひます。

吉野山の離宮　現中莊村宮瀧附近に在つた

ぬば玉の夜の更けぬれば久木生ふる清き川原に千鳥しば鳴く　萬葉集卷六

これも赤人の歌で、前の歌と同時に吉野山の離宮で作つた歌でありまして、靜肅な感動と、その感動の現れが、前の歌と通じてゐるところがあります。「ぬば玉の夜の更けぬれば」と押して行く勢が既に異常でありまして、澄みきつた世界へ誘ひこまれる心地がいたします。それを三句から五句まで連續した句法でうけて、最後に「千鳥しば鳴く」と引緊つた音を以て結んでゐます。暢達の姿があつて、輕い滑りになりません。各音の含む響が虔しく緊つてゐるためであります。この歌は前の歌とともに、赤人の傑作といふべきであらうと思ひます。

天の香具山　現奈良縣磯城郡香久山村に在る大和三山の一

春すぎて夏きたるらし白妙のころもほしたり天の香具山　萬葉集卷一

持統天皇の御歌として知られてゐます。第二句と第四句とで切れてゐるために、調子が落著いて、初夏の心持が現れてゐます。第五句の名詞止も、この場合よくすわつて、動かせない重みを持つてゐます。秀作であると思ひます。歌の命は、大

持統天皇　第四十一代

抵第五句できまります。第五句だけでは無論きまりませんが、少くも、第五句の調子が輕ければ、歌全體を輕くしてしまふやうであります。これは前に擧げた歌例について見ても分かります。萬葉集には字餘り句が多いのでありますが、それは大抵第五句にあるやうであります。それも、第五句の調子を重くしたいといふ自然の要求から來てゐるのであらうと思ひます。

夏實の川　現中莊村栄摘附近を流れる吉野川の一部

吉野なる夏實の川の川淀に鴨ぞ鳴くなる山かげにして　萬葉集卷三

湯原王　天智天皇の皇孫志貴皇子の御子

湯原王の御歌であります。第一句からすら〳〵と連續した句法を第四句で一旦踏み切つてゐるために、緊りと勢が生じ、更に「山かげにして」といふ生動の句をすゑて、この句、一首全體に反響するほどの力になつてゐます。感歎に値する作でありませう。

源實朝　二八頁參照

今一つ、源實朝の歌を擧げます。

大海の磯もとどろに寄する波割れて碎けて裂けて散るかも

波の韡韜と寄せかへす景情に對して、「割れて」といひ、「碎けて」と重ね、「裂けて」と疊んで、その重疊の勢を「かも」といふ強い響で結んだ力を想ひ見るべきであります。一本、第三句「よる波の」とありますが、これは、必ず「よする波」と一旦踏み切らねば歌の勢を成さぬのであります。波の姿と、感動の姿と、そしてそれを現した歌の姿と、如何によく一致してゐるかを知ることが出來ませう。

以上諸例によつて、少しく歌の調子を說きましたが、心の相が人々によつて異なり、人の心も樣々に動くのでありますから、その動きの狀が如何にして歌の調子に現れるかといふことは、到底說き盡くせる筈がありません。唯、それが如何なる心の動きであらうとも、調子の上に緊張して現れてをらねばならぬことは、どの歌にも通じて言ひ得る所であります。柔らかきものは柔らかきに緊張してをり、強きものは強きに緊張してをり、暢びやかなるは暢びやかに緊張してをらねばならぬのであります。その緊張の快適に現れてゐるのが萬葉集でありまして、さやうな歌の調子を萬葉調と唱へてゐるのであります。緊張の調子が緊張の主觀から生まれることは贅言に及びません。

（歌道小見）

歌道小見
赤彥全集第三卷所收

四　梢の花

西行
俗名佐藤義淸
歌僧
元左兵衞尉
建久元年（一八五〇）歿
年七十三

西　行

吉野山梢の花を見し日より心は身にもそはずなりにき

おしなべて花の盛りになりにけり山の端ごとにかかる白雲

松風の音あはれなる山里にさびしさそふるひぐらしのこゑ

きりぎりす夜寒に秋のなるままに弱るか聲の遠ざかりゆく

寂びしさにたへたる人のまたもあれな庵ならべむ冬の山里
ひとりすむかた山かげの友なれや嵐にはるる冬の夜の月

源實朝

源實朝
鎌倉幕府第三代の將軍
右大臣
歌人
承久元年（一八七九）歿年二十八

今朝みれば山も霞みてひさかたの天の原より春は來にけり
春過ぎていくかもあらねどわが宿の池の藤波うつろひにけり
箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ

箱根路
箱根山（現神奈川・靜岡兩縣に跨がる）から伊豆へ通ずる山路
伊豆
伊豆國
現靜岡縣の内
沖の小島
初島
現同縣熱海市に所屬

吹く風の涼しくもあるかおのづから山の蟬鳴きて秋は來にけり
木の葉ちり秋も暮れにし片岡のさびしき杜に冬は來にけり
ゆふされば潮かぜ寒し波間より見ゆる小島に雪はふりつつ
いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子の母を尋ぬる
ものいはぬ四方のけだものすらだにも哀れなるかなや親の子を思ふ
時によりすぐれば民のなげきなり八大龍王雨やめたまへ

五　遊ぶ子供

舞へ舞へ蝸牛　舞はぬものならば　馬の子や
牛の子に蹴ゑさせてむ　踏み破らせてむ　ま
ことに美しく舞うたらば　花の園まで遊ばせ
む

松の木かげに立ちよりて　岩もる水をむすぶ
間に　扇の風も忘られて　夏なき年とぞ思ひ
ぬる

〔出所〕梁塵秘抄　二十卷　平安時代末期に成つた歌謠集。後白河法皇御撰

池の涼しき汀には　夏のかげこそなかりけれ
こだかき松を吹く風の　聲も秋とぞ聞えぬる

遊をせむとや生まれけむ　たはぶれせむとや
生まれけむ　遊ぶ子供の聲きけば　我が身さ
へこそゆるがるれ

佛は常にいませども　現ならぬぞあはれなる
人の音せぬ曉に　ほのかに夢に見え給ふ

本居宣長
國學者
伊勢國（三重縣）の人
享和元年（一四六一）歿
年七十二
日本紀
日本書紀
三十卷
國初から持統天皇迄の史書
養老四年（一三八〇）撰進
舍人親王等御撰
繪合
源氏物語の第十七卷
竹取
竹取物語
二卷
平安時代初期に成つた物語
作者未詳

六　物語論

本居宣長

中むかしのほど、物語といひて一くさの書あり。物語とは、今の世に「はなし」といふことにて、すなはち昔話なり。日本紀に「談」といふ文字をぞ「ものがたり」と訓みたる。そを書に名づけて作れることは「繪合」の巻に「物語のいできはじめの祖なる竹取の翁に、宇津保の俊蔭を合はせて」とあれば、此の竹取やはじめなりけむ。其の物語、誰が何時の代に作れりとはさだかには知られねども、いたくふるき物とも見えず、延喜などよりはこなたの物とぞ見えたる。其の外、かのたぐひなる古物語ども、此の源氏のよりさきにも、かず〳〵多くありしと聞えて、其の名どもあまた聞えたれど、後の世には傳はらぬぞ多かめ

宇津保
宇津保物語
二十卷
平安時代中期に成つた物語
作者未詳
延喜
醍醐天皇の御代の年號（一五六一―一五八二）
源氏
源氏物語
五十四帖
平安時代中期に成つた物語
作者紫式部
榮華物語
世繼物語ともいふ
四十卷
平安時代中期に成つた歷史物語
作者未詳
煙の後
榮華物語の第三十七卷

る。又同じころ、それより後の物も多くして、今の世にも、これかれとあまたのこれり。榮華物語の「煙の後」の巻に「物語合はせとて、今あたらしく作りて、左右かたわきて、二十人合はせなどせさせ給ひて、いとをかしかりけり」といへるを見れば、其のころも多く作りたりしなり。

さて、もろ〳〵の物語のさま、おの〳〵少しづつかはりてさまざまなれども、何れも昔の世にありし事を語る由にて、あるはいさゝかかたち有りし事をよりどころにして、作りかへても書き、あるは其の名をかくしもし、かへもして書き、あるはみながら作りもし、又稀には有りしことを其のまゝに書けるもありて、樣々なる中に、まづ多くは作りたるものなり。

さて、そはいかなる趣なる物にて、何のためによむものぞと

いふに、大かた物語は、世の中にありとある、よき事あしき事、めづらしき事をかしき事、おもしろき事あはれなる事などのさまざまを書きあらはして、其のさまを繪にもかきまじへなどして、つれ〴〵なるほどのもてあそびにし、又は心のむすぼほれて物おもはしきをりなどのなぐさめにもし、世の中のあるやうをも心得て、もののあはれをもしるものなり。

こゝらの物語書どもの中に、源氏物語は殊にすぐれてめでたき物にして、大かたさきにも後にもたぐひなし。まづこれよりさきなる古物語どもは、何事もさしも深く心をいれて書けりとしも見えず。たゞ一わたりにて、あるはめづらかに興ある事をむねとし、おどろ〳〵しきさまの事多くなどして、何れも何れも、もののあはれなるすぢなどは、さしもこまやかに

狹衣
狹衣物語
四卷
平安時代中期に成つた物語
作者未詳

深くはあらず。又これより後の物語どもは、狹衣などは、何事ももはら此の物語のさまをならひて、心をいれたりとは見ゆるものから、こよなく劣れり。其の外もみな異なることなし。

たゞ此の物語ぞこよなくて、殊に深くよろづに心をいれて書ける物にして、すべての文詞のめでたきことは更にもいはず、世にふる人のたゝずまひ、春・夏・秋・冬をり〳〵の空のけしき、木・草のありさまなどまで、すべて書きざまめでたき中にも、男・女、其の人々のけはひ心ばせを、おの〳〵こと〳〵に書き分けて、ほめたるさまなども、皆其の人〳〵のけはひ心ばへにしたがひて、ひとやうならず、よく分かれて、うつゝの人にあひ見る如くおしはからるゝなど、おぼろげの筆の、かけても及ぶべきさまにあらず。

さて又、よろづよりもめでたきことは、まづからぶみなどは、世にすぐれたりといふも、世の人の、事にふれて思ふ心のありさまを書けることは、たゞ一わたりのみこそあれ、いとあらく浅きものなり。すべて人の心といふものは、からぶみに書ける如く、ひとかたにつきぎりなるものにはあらず。深く思ひしめる事にあたりては、とやかくやと、くだ〳〵しくめゝしく、みだれあひてさだまりがたく、さま〴〵のくま多かるものなるを、此の物語には、さるくだ〳〵しきくま〴〵まで、のこるかたなく、いともくはしくこまかに書きあらはしたること、曇なき鏡にうつしてむかひたらむが如くにて、大かた人の情のあるやうを書けるさまは、やまともろこし、いにしへ今ゆくさきにも、たぐふべき書はあらじとぞおぼゆる。

源氏物語玉の小櫛　九卷　源氏物語の註釋書　寛政十一年（一七九九）刊

又、すべて卷々の中に、めづらしくおどろ〳〵しくめさむるやうの事はをさ〳〵なくて、はじめよりをはりまで、たゞ世のつねのなだらかなる事の同じやうなるすぢをのみいひて、いと長き書なれども、讀むにうるさくおぼゆることなく、倦むことはなくて、たゞつゞきゆかしくのみぞおぼゆるかし。おのれ教子どものために、はやくより、此の物語を讀みときてきかすることあまたかへりになりぬるを、あだし書どもは、かばかり長からぬだに、說くに倦む心もまじるを、これはさしも長き書にて、年月をわたれども、いさゝかも倦むこゝろいでこず、度毎にはじめて讀みたらむこゝちして、めづらしくをかしくのみおぼゆるにも、いみじくすぐれたるほどは知られて、かへすがへすめでたくなむ。

（源氏物語玉の小櫛）

鬼界が島　薩南諸島の一島硫黄島（現鹿兒島縣大島郡十島村に所屬）かといふ

二人　藤原成經と平康頼

俊寛僧都　法勝寺執行

治承三年（一八三九）歿年三十七

鳥羽　現京都市下京區上鳥羽及び伏見區下鳥羽

六波羅　現京都市東山區内、鳥邊山西方一帶の地當時平家一門の邸宅地

七　有王

さる程に、鬼界が島へ三人流されたりし流人、二人は召し還され、都へ上りぬ。俊寛僧都一人、憂かりし島の島守となりにけるこそうたてけれ。

僧都の、稚うより不便にして召し使はれける童あり。名をば有王とぞ申しける。鬼界が島の流人、今日既に京都へ入ると聞えしかば、鳥羽まで行き向かうて見けれども、我が主は見え給はず。「如何に」と問へば、「それは猶罪深しとて、島に殘され給ひぬ」と聞いて、心憂しなども愚かなり。常は六波羅邊にたたずみありいて聞きけれども、赦免あるべしとも聞き出さず。僧都の御娘の忍びて在しける所へ參りて、「此の瀬にも洩れさ

薩摩潟　現鹿兒島縣薩摩半島附近の海かといふ

薩摩國　現鹿兒島縣の内

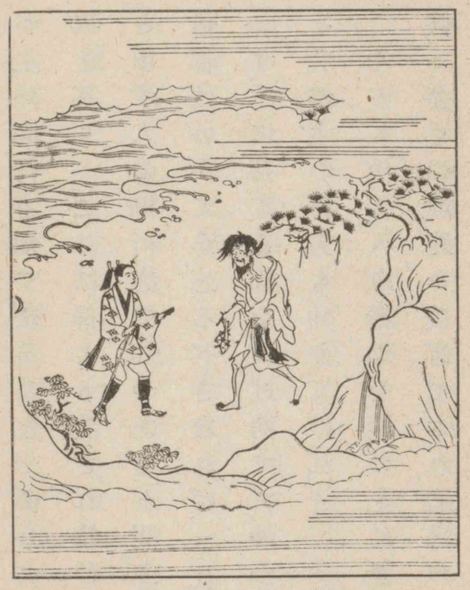
せ給ひて、御上りも候はず。如何にもして彼の島へ渡つて、御行方を尋ね參らせんとこそ思ひ立ちて候へ。御文賜はらん」と申しければ、泣く〳〵書いて賜うだりけり。暇を請ふともよも許さじとて、父にも母にも知らせず、唐船の纜は、卯月・五月にも解くなれば、夏衣たつを遲くや思ひけん、三月の末に都を出でて、多くの波路を凌ぎつゝ、薩摩潟へぞ下りける。薩摩より彼の島へ渡る船津にて、人怪しみ、著たる物を剝ぎ取りなどしけれども、少しも後悔せず、姫御前の御文ばかりぞ、人に見せじとて、髻結の中に隱したりける。

さて商人船に乘つて件の島へ渡つて見るに、都にて幽かに傳へ聞きしは、事の數にもあらず。田もなし、畑もなし、村もなし、里もなし。自ら人はあれども、言ふ詞も聞き知らず。若し

法勝寺　現京都市左京區岡崎に在つた天台宗の名刹

かやうの者共の中に、我が主の行方知りたる者やあらんと、「物申さう」と言へば、「何事」と答ふ。「これに都より流され給ひし法勝寺の執行の御房と申す人の御行方や知りたる」と問ふに、法勝寺とも執行とも、知りたらばこそ返事もせめ、唯頭を掉つて「知らず」と言ふ。其の中に或者が心得て、「いさとよ、さやうの人は三人これにありしが、二人は召し還されて都へ上りぬ。今一人は殘されて、あそこここゝに惑ひありけども、行方も知らず」とぞ言ひける。山の方の覺束なさに、遙かに分け入り、峯に攀ぢ、谷に下れども、白雲跡を埋んで、往き來の道もさだかならず、晴嵐夢を破つて、其の面影も見えざりけり。山にては終に尋ねも逢はず、海のほとりに著いて尋ぬるに、沙頭に印を刻む鷗、澳の白洲に集く濱千鳥の外は、跡問ふ者も無かりけり。

或朝、磯の方より、蜻蛉などのやうに痩せ衰へたる者一人よろぼひ出できたり。もとは法師にてありけりと覺えて、髪は空樣へ生ひあがり、萬づの藻屑取附いて、荊を戴いたるが如し。節あらはれて皮ゆたひ、身に著たる物は、絹・布の分きも見えず。片手には荒布を拾ひ持ち、片手には網人に魚を貰うて持ち、歩むやうにはしけれども、はかも行かず、よろよろとして出できたり。「都にて多くの乞丐人見しかども、か



延寶本平家物語插繪

かる者をば未だ見ず。知らず、我、餓鬼道に尋ねきたるか」と思ふほどに、彼も此も次第に歩み近づく。「若しかやうの者も、我が主の御行方知つたることやあらん」と、「物申さう」と言へば、「何事」と答ふ。「これに都より流され給ひし法勝寺の執行の御房と申す人の御行方や知つたる」と問ふに、童は見忘れたれども、僧都はいかでか忘るべきなれば、「これこそそれよ」と云ひも敢へず、手に持てる物を投げ捨てて、沙の上に倒れ伏す。さてこそ、我が主の行方も知りてけれ。

やがて消え入り給ふを、膝の上に掻乗せ奉り、「有王が参つて候。多くの浪路を凌ぎて、これ迄尋ね参りたる甲斐もなく、いかにやがて憂目をば見せさせ給ふぞ」と、泣く〳〵申しければ、やゝあつて、少し人心地出で來、扶け起されて、「誠に汝がこれ迄尋ねきたる志の程こそ神妙なれ。明けても暮れても、都の事のみ思ひ居たれば、戀ひしき者共が面影は、夢に見る折もあり、幻に立つ時もあり。身もいたく疲れ弱つて後は、夢も現も思ひ分かず。されば、汝がきたれるも唯夢とのみこそ覺ゆれ。若しこの事夢ならば、覺めての後は如何せん。」有王、「現にて候なり。此の有様にて、今まで御命の延びさせ給ひて候こそ、不思議には覺え候へ」と申せば、「さればこそ。去年少將や判官入道に棄てられて後の便りなさ、心の中をば唯推量るべし。その瀬に身をも投げんとせしを、由なき少將の『今一度都の音信をも待てかし』など慰め置きしを、愚かに若しやと頼みつゝ、存へんとはせしかども、此の島には人の食ひ物絶えて無き所なれば、身に力のありし程は、山に上つて硫黄と云ふ物を採り、九

少將　藤原成經　成親の子　右近衛少將兼　丹波守　後參議に至る
建仁二年（一八六二）歿
判官入道　平康頼　檢非違使尉　寶物集の著者
九國　九州

國より通ふ商人にあひ、物に換へなどせしかども、日にそへて弱り行けば、今は其のわざもせず。かやうに日の長閑なる時は、磯に出でて、網人・釣人に手を摺り膝を屈めて魚を貰ひ、汐干の時は、貝を拾ひ、荒布を取り、磯の苔に露の命を懸けてこそ、今日までも存へたれ。さらでは、憂世を渡るよすがをば、如何にしつらんとか思ふらん。」

僧都「これにて何事をも言はばやとは思へども、いざ我が家へ」と宣へば、「此の御有様にても、家を持ち給へる不思議さよ」と思ひて行く程に、松の一叢ある中に、より竹を柱とし、蘆を結ひて、桁・梁に渡し、上にも下にも松の葉をひしと取懸けたれば、風雨たまるべうもなし。昔は法勝寺の寺務職にて、八十餘箇所の庄務を司どりしかば、棟門・平門の内に、四五百人の所從・眷屬

西八條　西八條殿　現京都市下京區内、東寺の北に在つた平清盛の邸

鞍馬　鞍馬山　現京都府愛宕郡鞍馬村に在る

に圍繞せられてこそ在せしか。目のあたりかゝる憂目を見給ひけるこそ不思議なれ。

僧都、現にてありけりと思ひ定めて、「抑、去年少將や判官入道が迎にも、これ等が文と云ふこともなし。今、汝が便りにも音信の無きは、かうとも謂はざりけるか。」有王涙に咽びうつぶして、暫しは物も申さず。やゝあつて起き上り、涙を抑へて申しけるは、「君の西八條へ出でさせ給ひしかば、やがて追捕の官人參つて、御内の人々搦め取り、御謀反の次第を尋ねて、失ひ果て候ひぬ。北の方は、稚き人を隱しかね參らせ給ひて、鞍馬の奥に忍ばせ給ひて候ひしに、此の童ばかりこそ時々參つて宮仕へつかまつり候ひしが、何れも御歎の愚かなることは候はざりしかども、稚き人は、餘りに戀ひ參らさせ給ひて、參り候度

奈良
現奈良市

毎に『有王よ、鬼界が島とかやへ我具して參れ』とむづからせ給ひ候ひしが、過ぎ候ひし二月に、もがさと申すことに失せさせ給ひぬ。北の方は、其の歎と申し、これの御事と申し、一方ならぬ御思に沈ませ給ひ、日に添へて弱らせ給ひ候ひしが、同じ三月二日の日、遂にはかなくならせ給ひぬ。今は姫御前ばかり、奈良の姨御前の御許に御渡り候。これに御文賜はつて候」とて、取出いて奉る。

開けて見給へば、有王が申すにたがはず書かれたり。奥には、「などや、三人流されたる人の、二人は召し還されて候に、今迄御上り候はぬぞ。哀れ、高きも卑しきも、女の身ばかり心うかりけるものはなし。男の身にて候はば、渡らせ給ふ島へも、などか尋ね參らで候べき。此の有王御伴にて、急ぎ上らせ給へ」

人の親の云々
人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな（後撰集）

とぞ書かれたる。「これ見よ、有王。此の子が文の書きやうのはかなさよ。己を伴にて、急ぎ上れと書きたるこそ恨めしけれ。心に任せたる俊寛が身ならば、何とてか三年の春秋をば送るべき。今年は十二になるとこそ思ふに、これ程はかなくては、人にも見え、宮仕をもして、身をも扶くべきか」とて泣かれけるにこそ、人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふ程も知られけれ。

「此の島へ流されて後は、暦も無ければ月日の換り行くをも知らず、唯自ら花の散り、葉の落つるを見て春秋を辨へ、蟬の聲麥秋を送れば夏と思ひ、雪の積るを冬と知る。白月黑月の變り行くを見ては三十日を辨へ、指を折りて數ふれば、今年は六つに成ると思ひつる稚き者も、早先立ちけるござんなれ。西

八條へ出でし時、此の子が我も行かうと慕ひしを、やがて歸らうずるぞと拵へ置きしが、今のやうに覺ゆるぞや。それを限りと思はましかば、今暫くもなどか見ざらん。親となり、子となり、夫婦の緣を結ぶも、皆此の世一つに限らぬ契ぞかし。などさらば、それ等がさやうに先立ちけるを、今迄夢幻にも知らせざりけるぞ。人目も愧ぢず、如何にもして命生かうと思ひしも、これ等を今一度見ばやと思ふ爲なり。姫が事ばかりこそ心苦しけれども、それも生き身なれば、歎きながらも過さんずらん。さのみ存へて己に憂目を見せんも、我が身ながらもつれなかるべし」とて、自らの食事を止め、偏へに彌陀の名號を唱へて、臨終正念をぞ祈られける。

有王渡つて二十三日と云ふに、其の庵の内にて遂に終り給ひぬ。歳三十七とぞ聞えし。有王、空しき姿に取附き、天に仰ぎ地に俯し、泣き悲しめどもかひぞなき。心の行く程泣きあきて、「やがて後世の御供仕るべう候へども、此の世には姫御前ばかりこそ御渡り候へ。後世弔ひ參らすべき人も候はず。暫し存へて、弔ひ參らせ候はん」とて、臥戸を改めず、庵を切り懸け、松の枯枝、蘆の枯葉を取掩ひ、藻鹽の煙となし奉り、荼毘事終へにければ、白骨を拾ひ、頸に懸け、又商人船の便りに、九國の地へぞ著きにける。

僧都の御女の在しける處に參つて、ありしやう初よりこまごまと語り申す。「中々文を御覽じてこそ、いとゞ御思は勝らせ給ひて候ひしか。硯も紙も候はねば、御返事にも及ばず。思し召され候ひし御心の中、さながら空しうて止み候ひにき。

今は生々世々を送り、他生曠劫を隔つとも、いかでか御聲をも聞き、御姿をも見參らせ給ふべき」と申しければ、伏し轉び、聲も惜しまず泣かれけり。やがて、十二の歳尼になり、奈良の法華寺に行ひ澄まして、父母の後世を弔ひ給ふぞ哀れなる。有王は、俊寛僧都の遺骨を頸にかけ、高野へ登り、奥の院に納めつゝ、蓮華谷にて法師になり、諸國七道修行して、主の後世をぞ弔ひける。

（平家物語）

法華寺　現奈良市法華寺町に在る眞言律宗の名刹　總國分尼寺
高野　高野山　現和歌山縣伊都郡に在る古義眞言宗の總本山金剛峯寺の寺界
奥の院　奥の院谷
七道　東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の七道
平家物語　十二卷（流布本）　鎌倉時代初期に成つた軍記物語　作者未詳

八　安井夫人

森鷗外

森鷗外　名は林太郎　小説家　飜譯家　文學博士　醫學博士　陸軍軍醫總監　帝室博物館總長兼圖書頭　大正十一年歿　年六十一

仲平は二男である。兄文治が九つ、仲平が六つの時、父は兄弟を殘して江戸へ立つたのである。父が江戸から歸つた後、兄弟の脊丈が伸びてからは、二人とも毎朝書物を懷中して畑打ちに出た。そして外の人が煙草休をする間、二人は讀書に耽つた。

父が始めて藩の教授にせられた頃の事である。十七八の文治と十四五の仲平とが例の畑打ちに通ふと、道で行き逢ふ人が、皆言ひ合はせたやうに二人を見較べて、連があれば連に何事をかさゝやいた。脊の高い、色の白い、目鼻立の立派な兄文治と、脊の低い、色の黑い、片目の弟仲平とが、いかにも不釣合

仲平　安井衡　號は息軒　儒者　日向國（宮崎縣）の人　明治九年歿　年七十八
父　安井朝完　號は滄洲　儒者　文化六年（二四六九）歿　藩　日向國飫肥藩

篠崎小竹
名は弼
儒者
大阪の人
嘉永四年（一八五一）歿
年七十一
清武村
現宮崎縣宮崎郡清武村
大阪土佐堀三丁目の藏屋敷
現大阪市北區中之島に在つた飫肥藩の藏屋敷

な一對に見えたからである。兄弟同時にした疱瘡が、兄は輕く、弟は重く、弟は大痘痕になつて、剩へ右の目が潰れた。父も小さい時疱瘡をして片目になつてゐるのに、又仲平が同じ片端になつたのを思へば、「偶然」と云ふものも殘酷なものだと云ふ外ない。

仲平に先だつて、體の弱い兄の文治は死んだ。仲平が大阪へ修行に出て、篠崎小竹の塾に通つてゐた時のことである。仲平は二十一の春、金子十兩を父の手から受取つて、清武村を立つた。そして、大阪土佐堀三丁目の藏屋敷に著いて、長屋の一間を借りて自炊をしてゐた。儉約のために大豆を鹽と醬油とで煮て置いて、それを飯の菜にしたのを、藏屋敷では「仲平豆」と名づけた。同じ長屋に住むものが、あれでは體が續くま

いと氣遣つて、酒を飲むことを勸めると、仲平は素直に聽き納れて、毎日一合づつ酒を買つた。そして晩になると、その一合入りの德利を紙撚で縛つて、行燈の火の上につるして置く。

安井息軒

そして燈火に向かつて、篠崎の塾から借りて來た本を讀んでゐるうちに、半夜人定まつた頃、燈火で尻をあぶられた德利の口から、蓬々として蒸氣が立ち昇つてくる。仲平は卷を釋いて、德利の酒を旨さうに飲んで寢るのであつた。中一年置いて、二十三になつた時、仲平は兄の訃音を得て、すぐに大阪を立つて歸つた。

古賀侗庵　名は煜　精里の子　德川幕府の儒官　弘化四年（一五〇七）歿　年六十

昌平黌　江戸學問所・昌平坂學問所ともいつた　德川幕府設立の學校　元祿四年（一三五一）創設　現東京市本郷區湯島に在つた

忍が岡　現東京市下谷區上野公園一帶の臺地

中野　現淸武村大字木原字中野

其の後、仲平は二十六で江戸に出て、古賀侗庵の門下に籍を置いて、昌平黌にはひつた。　痘痕があつて、片目で、脊の低い田舍書生は、こゝでも同窓に馬鹿にせられずには濟まなかつた。それでも、仲平は無頓著に默り込んで、獨り讀書に耽つてゐた。座右の柱に、半折に何やら書いて貼つてあるのを、からかひに來た友達が讀んで見ると、「今は音を忍が岡の時鳥いつか雲井のよそに名告らむ」と書いてあつた。「や、えらい抱負ぢやぞ」と、友達は笑つて去つたが、腹の中では稍氣味惡くも思つた。

仲平はまだ江戸にゐるうちに、二十八で藩主の侍讀にせられた。　そして翌年藩主が歸國せられる時、供をして歸つた。

今年の正月から淸武村字中野に藩の學問所が立つことになつて、工事の最中である。　それが落成すると、六十一になる

父滄洲翁と、去年江戸から藩主の供をして歸つた二十九になる仲平とが、父子ともに講壇に立つ筈である。　其の時、滄洲翁が息子によめを取らうと云ひ出した。　併し、これは決して容易な問題ではない。

江戸歸り、昌平黌仕込と聞いて、「仲平さんはえらくなりなさるだらう」と評判する鄕里の人達も、痘痕があつて、片目で、脊の低い男振りを見ては、「仲平さんは不男だ」と陰言を云はずには置かぬからである。

滄洲翁は江戸までも修行に出た苦勞人である。　倅仲平が學問修行も一通り出來て、來年は三十にならうと云ふ年になつたので、是非よめを取つてやりたいとは思ふが、其の選擇のむづかしい事には十分氣が附いてゐる。　識らぬ少女と見合

をして緣談を取極めようなどと云ふことは、不可能であることは知れてゐる。仲平のよめは、早くから氣心を識り合つた娘の中から選び出す外ない。どうぞ、あれが人物を識つた女をよめに貰つてやりたい。翁はかう考へた。そして、形が地味で、心の氣高い、本も少しは讀むと云ふ娘はないかと思つてみても、生憎さう云ふ向きの女子は一人もない。

あちこち迷つた末に、翁の選擇はとう〳〵手近い川添の娘に落ちた。川添家は同じ清武村の大字今泉小字岡にある翁の夫人の里方で、そこに仲平の從妹が二人ある。妹娘の佐代は十六で、仲平のよめとしては若過ぎる。それに器量好しと云ふ評判の子で、世間では「岡の小町」と呼んでゐるさうである。どうも仲平とは不釣合なやうに思はれる。姉娘の豐なら、も

佐代　文久二年（一五二二）歿　年五十一

う二十で、遲く取るよめとしては、年齡の懸隔も甚だしいと云ふ程ではない。豐の器量は十人並である。性質にはこれと云つて立優つた所はないが、女にめづらしく快活で、心に思ふ儘を口に出して言ふ。その思ふ儘がいかにも素直で、なんのわだかまりもない。母親は「臆面なしで困る」と云ふが、それが翁の氣に入つてゐる。

翁は、仲平の姉で、長倉の御新造と云はれてゐる人に、意中を打明けた。「亡くなつた兄さんのおよめになら、一も二もなく來たのでございませうが」と云ひ掛けて、御新造は少しためらつた。御新造はさう云ふ方角からはお豐さんを見てゐなかつたのである。併し、お父樣に賴まれた上で考へて見れば、外に弟のよめに相應した娘も思ひ當らず、又お豐さんが不承知

を言ふに極めてゐるとも思はれぬので、御新造はとう〳〵使者の役目を引受けた。

川添の家では、雛祭の支度をしてゐた。奥の間へ色々な書附をした箱を一ぱい出し散らかして、其の中からお豐さんが、内裏樣やら五人囃やら、一つ〳〵取出して、綿や吉野紙を除けて置き竝べてゐると、妹のお佐代さんがちよい〳〵手を出す。「いゝからわたしに任せてお置き」と、お豐さんは妹を叱つてゐた。

そこの障子をあけて、長倉の御新造が顔を出した。手にはみやげに切らせて來た緋桃の枝を持つてゐる。「まあ、お忙しい最中でございますね。」

お豐さんは尉姥の人形を出して、箒と熊手とを人形の手に插してゐたが、其の手を停めて桃の花を見た。「お内の桃はもうそんなに咲きましたか。こちらのはまだ莟がずつと小さうございます。」「出掛に急いだもんですから、ほんの少しばかり切らせて來ました。澤山お活けになるなら、いくらでも取りにおよこしなさいよ。」かう云つて、御新造は桃の枝をわたした。

お豐さんはそれを受取つて、妹に「こゝは此の儘そつくりして置くのだよ」と云つて置いて、桃の枝を持つて勝手へ立つた。

御新造は跡から附いて來た。

お豐さんは臺所の棚から手桶をおろして、それを持つて側の井戸端に出て、水を一釣瓶汲み込んで、それに桃の枝を投げ

入れた。すべての動作がいかにも甲斐々々しい。使命を含んで來た御新造は、これならば弟のよめにしても早速役に立つだらうと思つて、微笑を禁じ得なかつた。下駄を脱ぎ棄てて臺所にあがつたお豐さんは、壁に釣つてある竿の手拭で手をふいてゐる。其の側へ御新造が摩り寄つた。

「安井では仲平におよめを取ることになりました。」劈頭に御新造は主題を道破した。

「まあ。どこから。」

「およめさんですか。」

「えゝ。」

「そのおよめさんは」と云ひさして、ぢつとお豐さんの顔を見つゝ、「あなた。」

お豐さんは驚き呆れた顔をして默つてゐたが、暫くすると、其の顔に笑が湛へられた。「謔でせう。」

「本當です。わたしそのお話をしに來ました。これからお母樣に申し上げようと思つてゐます。」

お豐さんは手拭を離して、兩手をだらりと垂れて、御新造と向き合つて立つた。顔からは笑が消え失せた。「わたし、仲平さんはえらい方だと思つてゐますが、夫にするのは厭でございます。」冷然として言ひ放つた。

お豐さんの拒絶が餘り簡明に發表せられたので、長倉の御新造は話の跡を繼ぐ餘地を見出すことが出來なかつた。併し、これ程の用事を帶びて來て、それを二人の娘の母親に話さずにも歸られぬと思つて、直談判をして失敗した顚末を、川添

の御新造にざつと言つて置いて、ギヤマンのコップに注いで出された白酒を飲んで、暇乞をした。

川添の御新造は仲平贔屓だつたので、ひどく此の縁談の不調を惜しんで、お豐にしつかり言つて聞かせてみたいから、安井家へは當人の輕率な返事を打明けずに置いてくれと賴んだ。そこでお豐さんの返事を以て復命することだけは一時見合はせようと、長倉の御新造が受合つたが、どうもお豐さんが意を飜さうとは信じられないので、「どうぞ無理にお勸めにならぬやうに」と言ひ殘して、起つて出た。

長倉の御新造が川添の門を出て、道の二三町も來たかと思ふ時、跡から川添に使はれてゐる下男の音吉が驅けて來た。急に話したい事があるから、御苦勞ながら引返して貰ひたい

と云ふ口上を持つて來たのである。

長倉の御新造は意外の思をした。どうもお豐さんがさう急に意を飜したとは信じられない。何の話であらうか。かう思ひながら、音吉と一しよに川添へ戻つて來た。

「お歸掛をわざ〳〵お呼び戻しいたして濟みません。實は存じ寄らぬ事が出來まして。」待ち構へてゐた川添の御新造が、戻つて來た客の、座に著かぬうちに云つた。

「はい。」長倉の御新造は女主人の顏をまもつてゐる。

「あの仲平さんの御緣談の事でございますね。わたくしは願うてもない好い先だと存じますので、お豐を呼んで話をいたしてみましたが、矢張まゐられぬと申します。さういたすと、お佐代が姉に其の話を聞きまして、わたくしの所へ參つて、

何か申しさうにいたして申さずにをりますのでございます。『なんだえ』と、わたくしが尋ねますと、『安井さんへわたくしが參ることは出來ますまいか』と申します。およめに往くと云ふことはどう云ふわけのものか、ろくに分からずに申すかと存じまして、色々聞いて見ましたが、あちらで貰うてさへ下さるなら自分は往きたいと、きつぱり申すのでございます。いかにも差出がましい事でございまして、あちらの思はくもいかがとは存じますが、兎に角あなたに御相談申し上げたいと存じまして。」さも言ひにくさうな口吻である。

長倉の御新造は愈〻意外の思をした。父は此の話をする時、「お佐代は若過ぎる」と云つた。又「あまり別品でなあ」とも云つた。併し、お佐代さんを嫌つてゐるのでないことは、平生から

分かつてゐる。多分、父は釣合を考へて、年が行つてゐて、器量の十人並なお豐さんをと望んだのであらう。それに、若くて美しいお佐代さんが來れば、不足はあるまい。これは兎に角父にも弟にも話して見て、出來る事ならお佐代さんの望通りにしたいものだと、長倉の御新造は思案してから云つた。「まあ、さうでございますか。父はお豐さんをと申したのでございますが、わたくしがちよつと考へて見ますに、お佐代さんでは惡いとは申さぬだらうと存じます。早速あちらへまゐつて、申してみることにいたしませう。でも、あの内氣なお佐代さんが、よくあなたに仰しやつたものでございますね。」

「それでございます。わたくしも本當にびつくりいたしました。子供の思つてゐる事は何から何まで分かつてゐるや

うに存じてゐましても、大違ひでございます。お父様にお話し下さいますなら、當人を呼びまして、こゝで一應聞いて見ることにいたしませう。」かう云つて母親は妹娘を呼んだ。

お佐代はおそる〳〵障子をあけてはひつた。

母親は云つた。「あの、さつきお前の云つた事だがね、仲平さんがお前のやうなものでも貰つて下さることになつたら、お前きつと往くのだね。」

お佐代さんは耳まで赤くして、「はい」と云つて、下げてゐた頭を一層低く下げた。

婚禮は長倉夫婦の媒妁で、まだ桃の花の散らぬうちに濟んだ。そして、これまで唯美しいとばかり云はれて、人形同樣に

思はれてゐたお佐代さんは、繭を破つて出た蛾のやうに、その控目な、内氣な態度を脱却して、多勢の若い書生達の出入する家で、天晴地歩を占めた夫人になりおほせた。

十月に學問所の明教堂が落成して、安井家の祝筵に親戚故舊が寄り集つた時には、美しくて、しかもきつぱりした若夫人の前に、客の頭が自然にさがつた。

（安井夫人）

安井夫人　鷗外全集第五卷所收

五十嵐力
國文學者
文學博士
早稲田大學教授
明治七年生

思無邪
詩三百、一言以て之を蔽ふ、曰く思邪無しと。（論語）

枕草子
七七頁參照

九　隨筆の說

五十嵐　力

隨筆にいろ〳〵ある。

一つは思無邪の心から、ぽろり〳〵とこぼれ落ちるのだ。ぽたり〳〵と滴り落ちるのだ。緒で繋げば數珠にも瓔珞にもなるが、それを繋がずに、ぽろり〳〵、ぽたり〳〵のまゝにして眺める味だ。頑是ない子供の、順序もない愛嬌おしやべりの味がそれだ。土筆や蕨が、思ひ出したやうに、あちこちに土から顏を出してゐる、あの味だ。

我が國の隨筆で、一番この味を得てゐるのは枕草子だ。思ひ出すまゝに、無邪氣に無遠慮に竝べる。後先を考へない。聯絡に心をとめない。統一などには尙更目をくれない。但し言ふ事は必ず思ふ事だ。それには、ふと浮かんだばかりの心の影もあらう。長い深い執念のちらと顏を出すのもあらう。熟知熟愛の事物を一二語に煎じつめた、出しぬけの表現もあらう。咽喉元に込みあげて來るのを抑へ切れずしてつい筆にした、法螺や戯言や憎まれ口もあらう。種類は千差萬別だが、しかし要するに、皆心に思つてゐる事だ。主觀的の眞實だ。そしてこれを言ふ根柢に於て思無邪だ。

この子供らしさと、我が儘と、負けじ魂と、かはつた趣味と、特殊の表現力と、それらが一つに渾融して出來た、ちり〳〵ばらばらの散珠文學、曼陀羅文學、それが枕草子の身上だ。それが、この草子が同種の文學のあひだに無類の地位を占める所以だ。

隨筆のもう一つは、知り盡くし、悟りぬいた人の、心の鏡に映つた影の自由な捕捉だ、とりとめもない記載だ。書く事は天地・人獸・蟲魚・草木の萬般にわたるが、知りぬいた心の現れには、知識を誇るいさゝかの厭味もない。言ふところは往々にして說法にもなり教訓にもなるが、悟り切つた心の所產には、いさゝかの物訓へぶりの氣障さもない。第一種に比べると、無邪氣な、出しぬけな、幼稚な、原始的な味は少いが、その斷片には、大きい豐かな背景を暗示する象徵的の味がある。大きい心が無邊雜多の外境に觸れて、融通無礙に、大自由・無束縛に動き變るのを氣樂に見るといふ、心往く味がある。隨つて、そこはかとなきよしなし言が、堂々たるよしあり言の及ばぬ趣を見せる。これがこの種の隨筆の特殊の味だ。我が國の文學で

徒然草
九七頁參照

一番これに近いのは徒然草だ。

隨筆の中の最も低級なのは、物識り隨筆と物訓へ隨筆とだ。知識を誇る隨筆と、教訓を押賣りする隨筆と、世にこれほど情ないものはない。江戸時代に出來たいはゆる隨筆にはこの類が多い。彼等の大部分は衒學だ、材料の蒐集だ。文學ではない。

あらゆる隨筆の中で最も隨筆らしいのは、第一種の出しぬけ式、思無邪式な原始的なものだが、しかしながら、最も圓熟して趣味に富み、氣品の高いのは、恐らく、學識・修養・經驗に於て豐かさを極めた至人の、限りなき精神的貯蓄が自然に滴り出でた、まに〳〵草であらう。無限量の經驗の中に釀し成された靈液が、移り變る外境に應じて、ランビキに掛けたやうに、ぽつ

論語　二十卷　經書　孔子の言行錄　四書の一
老子　二卷　子書　支那周代の哲人老子の敎を傳へた書

たりぽつたりと滴り落ちる。それが藝術的な磨きのかゝつた詞に現され、最小の形の中に最大の意義を見せて、繫がれぬ珠玉の如く、無造作にころ〳〵竝びに竝ぶ。世にもしこんな隨筆があつたら、いかに尊いことであらう。論語や老子は、その出來た形について見ると、人生修養の方面のみに於て、ほゞこれに近いものといふことが出來る。

（國文學者一夕話）

清少納言　清原元輔の女　一條天皇の皇后定子に仕へた

一〇　桃の木

清少納言

正月十日、空いと暗う、雲も厚く見えながら、さすがに日はいとけざやかに照りたるに、えせ者の家のうしろ、荒畠などいふところの、土もうるはしう直からぬに、桃の木の若だちて、いとしもとがちにさし出でたる、片つ方は青く、いま片つ方は濃くつやゝかにて、蘇枋の色なるが、日かげに見えたるを、いと細やかなる童の、狩衣はかけ破りなどして、髮はうるはしきがのぼりたれば、また紅梅の衣白きなどひきはこへたる男兒、半靴はきたる、木のもとに立ちて、「我によき木切りて、いで」など乞ふに、また髮をかしげなるわらはべの、柏ども綻びがちにて、袴は萎えたれど、色などよきうち著たる三四人、「卯槌の木のよからむ

はやく落ちにけり　大庚嶺の梅は早く落ちぬ誰か粉粧を問はん（大江維時）

黒戸　黒戸御所　清涼殿の北に在る御間　うへの御前　一條天皇　第六十六代

切りておろせ。お前にも召すぞ」などいふに、おろしたれば、走りかひ、取りわき、「われに多く」などいふこそをかしけれ。黒き袴著たるをのこはしり來て乞ふに、「待て」などいへば、木のもとによりて引きゆるがすに、危がりて、猿のやうにかいつきて居るもをかし。梅などのなりたる折も、さやうにぞあるかし。

殿上より、梅の花の皆散りたる枝を、「これはいかに」といひたるに、唯、「はやく落ちにけり」といらへたれば、その詩を誦して、黒戸に殿上人いと多く居たるを、うへの御前聞かせおはしまして、「よろしき歌など詠みたらむよりも、かゝる事はまさりたりかし。よういらへたり」と仰せらる。

うつくしきもの。ふりに書きたる乳兒の顏。雀の子のねずなきするに躍りくる。又、へにつけて居ゑたれば、親雀の蟲などもて來てくゝむるも、いとらうたし。三つばかりなる乳兒の、急ぎて這ひくる道に、いとちひさき塵などのありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびにとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。尼にそぎたる乳兒の、目に髮のおほひたるを搔きは遣らで、うちかたぶきて物など見る、いとうつくし。大きにはあらぬ殿上わらはの、裝束きたてられてありくもうつくし。をかしげなる乳兒の、あからさまに抱きてうつくしむ程に、かいつきて寐入りたるもらうたし。雛の調度。蓮の浮葉のいとちひさきを池より取りあげて見る。葵のちひさきもいとうつくし。何も〳〵ちひさき物は、いと

嵯峨野　現京都市の内
いなび野　印南野　現兵庫縣の内
交野　現大阪府の内
こま野　未詳
粟津野　現滋賀縣の内
飛火野　現奈良縣の内
しめぢ野　そうけ野　共に未詳
安部野　現大阪府の内
宮城野　現宮城縣の内
春日野　現奈良縣の内
むらさき野　紫野　現京都市の内

うつくし。いみじう肥えたる乳兒の二つばかりなるが、白うつくしきが、二藍のうすものなど、衣長くて襷あげたるが這ひ出でくるも、いとうつくし。八つ九つ十ばかりなるをのこの、聲をさなげにて文よみたる、いとうつくし。雞の雛の足高に、白うをかしげに、衣短なるさまして、ひよ〳〵とかしがましく鳴きて、人のしりに立ちてありくも、また親どもにつれだちて走るも、みなうつくし。かりの子。舍利の壺。瞿麥の花。

野は。嵯峨野さらなり。いなび野。交野。こま野。粟津野。飛火野。しめぢ野。そうけ野こそ、すゞろにをかしけれ。など、さつけたるにかあらむ。安部野。宮城野。春日野。むらさき野。

枕草子
三卷・五卷又は七卷
平安時代中期に成つた隨筆

讀經は。ゆふぐれ。

あそびは。よる、人の顏見えぬほど。

月のいとあかきに川を渡れば、牛の歩むまゝに、水晶などのわれたるやうに、水の散りたるこそをかしけれ。

たゞ過ぎに過ぐるもの。帆あげたる船。人のよはひ。春夏秋冬。

（枕草子）

菅原孝標の女　橘俊通の妻　後朱雀天皇の皇女に仕へた

光源氏　源氏物語の主人物

藥師佛　藥師瑠璃光如來　大醫王・醫王如來ともいふ　東方淨瑠璃世界の教主

九月三日　寛仁四年（一六八〇）九月三日

いまたち　現千葉縣市原郡内に在つた國司の別館かといふ

一一　あこがれ

菅原孝標の女

東路の道の果よりもなほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひ始めけることにか、世の中に物語といふもののあなるをいかで見ばやと思ひつゝ、つれ〴〵なる晝間、宵居などに、姉などの、その物語かの物語、光源氏のあるやうなど所々語るを聞くに、いとゞゆかしさまされど、我が思ふまゝに、空にいかでか覺え語らむ。いみじく心もとなきまゝに、等身に藥師佛を造りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつゝ、「京（みやこ）にとくあげ給ひて、物語の多く候なる、ある限り見せ給へ」と、身を捨てて額（ぬか）をつき祈り申す程に、十三になる年、上らむとて、九月三日門出して、いまたちといふ處に

下總國　現茨城・千葉兩縣の内　いかた　下總國池田郷　現千葉市寒川附近といふ

移る。

年來遊び馴れつる處を、あらはに毀ち散らして、立ちさわぎて、日の入りぎはのいと凄く霧りわたりたるに、車に乘るとてうち見やりたれば、人まには參りつゝ額をつきし藥師佛の立ち給へるを見捨て奉る、悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。

門出したる處は、めぐりなども無くて、かりそめの萱屋の、蔀なども無し。簾かけ、幕など引きたり。南は遙かに野の方見やらる。東・西は海近くて、いとおもしろし。夕霧たちわたりて、いみじうをかしければ、朝寐（あさい）などもせず、かた〴〵見つゝ、ここを立ちなむこともあはれに悲しきに、同じ月の十五日、雨かきくらし降るに、境を出でて、下總（しもつさの）國のいかたといふ處に泊りぬ。庵なども浮きぬばかりに雨降りなどすれば、恐しくてい

足柄
足柄峠　現靜岡・神奈川兩縣の界に在る
關山　現靜岡縣駿東郡に在つたといふ
駿河　駿河國
現靜岡縣の內
横走の關　現同縣駿東郡に在つた關所
岩壺　未詳

もねられず。野中に岡だちたる處に、たゞ木ぞ三つ立てる。その日は、雨に濡れたる物ども乾し、國に立ち遲れたる人々待つとて、そこに日を暮しつ。

まだ曉より足柄を越ゆ。まいて、山の中の恐しげなることいはむかたなし。雲は足の下に蹈まる。山の中らばかりの、木の下のわづかなるに、葵のたゞ三筋ばかりあるを、世離れてかゝる山中にしも生ひけむよと、人々哀れがる。水はその山に三處ぞ流れたる。

辛うじて越え出でて、關山にとゞまりぬ。これよりは駿河なり。横走の關の傍らに、岩壺といふ處あり。えもいはず大きなる石の四方なる中に、穴の空きたる中より出づる水の、清く冷たきこと限りなし。

清見が關　現靜岡縣庵原郡興津町に在つた關所
田子の浦　現同縣富士郡の海濱
大井川　現同縣の北部白根山附近に發源し同縣中部を流れて駿河灣に注ぐ

富士の山は此の國なり。わが生ひ出でし國にては、西面に見えし山なり。その山のさま、いと世に見えぬさまなり。さま異なる山の姿の、紺青を塗りたるやうなるに、雪の消ゆる世もなく積りたれば、色濃き衣に白き袙著たらむやうに見えて、山の頂の少し平ぎたるより、煙は立ちのぼる。夕暮は火の燃えたつも見ゆ。

清見が關は、片つ方は海なるに、關屋どもあまたありて、海までくぎぬきしたり。煙りあふにやあらむ、清見が關の浪も高くなりぬべし。おもしろきこと限りなし。

田子の浦は浪高くて、舟にて漕ぎめぐる。

大井川といふ渡りあり。水の、世の常ならず、すり粉などを

井の鼻といふ坂　現靜岡縣濱名郡新居町附近に在つた坂

三河國　現愛知縣の內

高師濱　現同縣豐橋市の東南に當る海岸

八橋　現同縣碧海郡知立町八橋附近

二村の山　現同縣額田郡山中村に在る二村山かといふ

宮路の山　宮路山　現同縣寶飯郡長澤村に在る

粟津　現滋賀縣大津市東部一帶の地

濃くて流したらむやうに、白き水早く流れたり。

井の鼻といふ坂の、えもいはずわびしきを上りぬれば、三河國の高師濱といふ。八橋は名のみして、橋のかたもなく、何の見どころもなし。

二村の山の中に泊りたる夜、大きなる柿の木の下に庵を作りたれば、夜一夜、庵の上に柿の落ちかゝりたるを、人々拾ひなどす。宮路の山といふ處越ゆる程、十月晦日なるに、紅葉散らで盛りなり。

嵐こそ吹き來ざりけれ宮路山まだもみぢ葉の散らで殘れる

粟津にとゞまりて、師走の二日京に入る。暗く行き著くべ

關　逢坂の關　現大津市南方の逢坂山に在つた關所

三條の宮　現京都市中京區內、三條通に在つた一條天皇の皇女修子內親王の御殿

くと、申の時ばかりに立ちて行けば、關近くなりて、山づらにかりそめなるきりかけといふものしたる上より、丈六の佛の未だ荒作りにおはするが、顏ばかり見やられたり。あはれに、人離れて何處ともなくておはする佛かなとうち見やりて過ぎぬ。こゝらの國々を過ぎぬるに、駿河の清見が關と、逢坂の關とばかりはなかりけり。いと暗くなりて、三條の宮の西なる處に著きぬ。

廣々と荒れたる處の、過ぎ來つる山々にも劣らず、大きに恐しげなるみ山木どものやうにて、都のうちとも見えぬ處のさまなり。ありもつかず、いみじうもの騷がしけれども、いつしかと思ひしことなれば、「物語求めて見せよ、見せよ」と、母を責むれば、三條の宮に、親族（しぞく）なる人の衞門の命婦とて侍ひける尋ね

松里　現千葉縣東葛飾郡松戸町

て、文やりたれば、めづらしがりて喜びて、「御前のをおろしたる」とて、わざとめでたき草子ども、硯の箱の蓋に入れておこせたり。嬉しくいみじくて、夜晝これを見るよりうち始め、又々も見まほしきに、ありもつかぬ京のほとりに、誰かは物語求め見する人のあらむ。

その春、世の中いみじう騷がしうて、松里のわたりの月影哀れに見し乳母も、三月朔日に亡くなりぬ。せむかたなく思ひ歎くに、物語のゆかしさも覺えずなりぬ。いみじく泣きくらして見出したれば、夕日のいと花やかにさしたるに、櫻の花殘りなく散り亂る。

散る花もまた來む春は見もやせむやがて別れ

侍從の大納言の御女　藤原行成の女　治安元年（一六八一）歿　年十三　殿の中將　藤原長家　道長の第五子　行成の女の夫

小夜ふけて小夜更けて寢覺めざりせば時鳥人傳にこそ聞くべかりけれ（拾遺集）

鳥邊山　現京都市東山區內、清水寺の西に在る墓地

し人ぞこひしき

又聞けば、侍從の大納言の御女、亡くなり給ひぬなり。殿の中將の思し歎くなるさま、我がものの悲しき折なれば、いみじく哀れなりと聞く。上り著きたりし時、「これ手本にせよ」とて、此の姫君の御手を取らせたりしを、「小夜ふけて寢ざめざりせば」など書きて、

鳥邊山谷に煙の燃えたたばはかなく見えし我

と知らなむ

と、いひ知らずをかしげに、めでたく書き給へるを見て、いとゞ涙を添へまさる。

かくのみ思ひくんじたるを、心も慰めむと、心苦しがりて、母、物語など求めて見せ給ふに、げにおのづから慰みゆく。紫の

太秦
太秦寺
現京都市右京區太秦に在る眞言宗の名刹
廣隆寺

在中將
伊勢物語
一卷
平安時代初期に成つた物語
作者未詳
とほぎみ・せりかは・しらゝ・あさうづ
いづれも今傳はらない

ゆかりを見て、續の見まほしく覺ゆれど、人語らひなども得せず。誰もいまだ京馴れぬほどにてえ見つけず。いみじく心もとなく、ゆかしく覺ゆる儘に、「この源氏の物語、一の卷よりして皆見せ給へ」と、心のうちに祈る。親の太秦（うづまさ）に籠り給へるにも、こと事なく此のことを申して、出でむ儘にこの物語見はてむと思へど見得ず。いと口惜しく思ひ歎かるゝに、をばなる人の田舍より上りたる處に渡いたれば、「いとうつくしう生ひなりにけり」など、あはれがり、めづらしがりて、歸るに、「何をか奉らむ。まめ〳〵しき物は、まさなかりなむ。ゆかしくし給ふなるものを奉らむ」とて、源氏の五十餘卷、櫃に入りながら、在中將、とほぎみ、せりかは、しらゝ、あさうづなどいふ物語ども、一袋取入れて、得て歸る心地の嬉しさぞいみじきや。

法華經五の卷
妙法蓮華經卷五
第十二提婆達多品から第十五從地涌出品に至る四品より成る

夕顏・浮舟
共に源氏物語中の女性

更級日記
一卷
平安時代中期に成つた日記

はしる〳〵、わづかに見つゝ、心も得ず心もとなく思ふ源氏を、一の卷よりして、人もまじらず、几帳の中にうち臥して、引出でつゝ見る。晝は日ぐらし、夜は目のさめたる限り、火を近くともして、これを見るより外のことなければ、おのづからなどは、空に覺え浮かぶを、いみじきことに思ふに、夢にいと清げなる僧の、黃なる地の袈裟著たるが來て、「法華經五の卷をとく習へ」といふと見れど、人にも語らず、習はむとも思ひ懸けず、物語のことをのみ心にしめて、われは此の頃わろきぞかし、盛りにならば、容貌（かたち）も限りなくよく、髮もいみじく長くなりなむ、夕顏・浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける心、まづいとはかなくあさまし。

（更級日記）

建禮門院右京太夫　世尊寺伊行の女　建禮門院に仕へた女院　建禮門院平德子　平清盛の女　高倉天皇中宮　安德天皇御母　建保元年（一八七三）薨　御年五十七　大原　現京都府愛宕郡大原村

一二　星月夜

建禮門院右京太夫

女院、大原におはしますとばかりは聞きまゐらすれど、さるべき人に知られでは參るべきやうもなかりしを、深き心をしるべにて、われなく尋ね參るに、やう〳〵近づくまゝに、山道のけしきより、まづ涙はさきだちて、いふかひなき御庵のさま、御すまひ、事柄、すべて目も見上げられず。

昔の御ありさま見まゐらせざらんだに、大方の事柄、いかゞことなのめならん。まして夢うつゝともいふかたなし。秋深き山おろし、近き梢に響きあひて、懸樋の水のおとづれ、鹿の聲、蟲の音、いづくものことなれど、ためしなき悲しさなり。都ぞ春の錦をたち重ねてし人々、六十餘人ありしかど、見忘るるさまに衰へはてたる墨染の姿にて、わづかに三四人ばかりぞ侍らはるゝ。その人々にも、「さてもや」とばかりぞ、我も人もいひ出でたりし。むせぶ涙におぼれて、すべて言もつゞけられず。

今や夢昔や夢と迷はれていかに思へどうつつとぞなき

あふぎみし昔の雲の上の月かかるみ山の陰ぞかなしき

心ざしの所は、比叡・坂本のわたりなり。雪はかきくらし降りたるに、都は遙かに隔たりぬる心地して、なにの思出にかと心細し。

比叡　比叡山　現京都府と滋賀縣との界に在る　坂本　現滋賀縣滋賀郡坂本村附近

關　逢坂の關

夜更くるほどに、雁の一つら、このゐたる上を過ぐる音のするも、まづ哀れとのみ聞きて、すゞろにしほ〳〵とぞ泣かるゝ。

うきことは所がらかとのがるれどいづくもかりの宿ときこゆる

關一つこそ越えぬるはいくほどならじを、梢に響く嵐の音も、都よりはことの外に烈しきに、

關越えていく雲井まで隔てねど都には似ぬ山おろしかな

十二月一日頃なりしやらむ、夜に入りて雨とも雪ともなくうち散りて、むら雲さわがしく、ひとへに曇りはてぬものから、むら〳〵星うち消えしたり。ひきかづき臥したるきぬを、ふけぬる程、丑二つばかりにやと思ふ程に、ひきのけて空を見上げたれば、殊に晴れて淺黄色なるに、光こと〴〵しき星の大きなるが、むらもなく出でたる、なのめならず面白く、花の紙に箔をうち散らしたるにより似たり。

こよひ始めて見そめたる心地す。さき〴〵も星月夜見なれたることなれど、是は折柄にや、異なる心地するにつけても、たゞ物のみ覺ゆ。

月をこそながめなれしか星の夜の深きあはれを今宵しりぬる

（建禮門院右京太夫集）

建禮門院右京太夫集　一卷　鎌倉時代初期に成つた歌集

一三　よき人

吉田兼好

吉田兼好
本姓卜部
歌僧
元左兵衛尉
正平五年（二〇一〇）歿
年六十八

久しくへだたりて逢ひたる人の、我が方にありつる事、かずかずに殘りなく語りつゞくるこそあいなけれ。へだてなく馴れぬる人も、程經て見るは、恥づかしからぬかは。

つぎざまの人は、あからさまにたち出でても、興ありつる事とて、息もつぎあへず語り興ずるぞかし。よき人の物語りするは、人あまたあれど、ひとりに向きて言ふを、おのづから人も聞くにこそあれ。よからぬ人は、誰ともなく、あまたの中にうち出でて、見ることのやうに語りなせば、皆同じく笑ひのゝしる、いとらうがはし。をかしき事を言ひてもいたく興ぜぬと、興なき事を言ひてもよく笑ふにぞ、品のほど、はかられぬべき。

人の見ざまのよしあし、ざえある人は、其の事など定めあへるに、おのが身をひきかけて言ひ出でたる、いとわびし。

今やうの事どものめづらしきを言ひ廣めもてなすこそ、又うけられね。世にことふりたるまで知らぬ人は心にくし。いまさらの人などのある時、こゝもとに言ひつけたることぐさ、物の名など、心得たるどち、かたはし言ひ交し、目見合はせ、笑ひなどして、心知らぬ人に心得ず思はすること、世なれず、よからぬ人の、必ずあることなり。

人の物を問ひたるに、知らずしもあらじ、ありのまゝに言はんはをこがましとにや、心まどはすやうに返り事したる、よか

らぬ事なり。　知りたる事も、なほさだかにと思ひてや問ふらん。　又、まことに知らぬ人も、などか無からん。　うら〻かに言ひ聞かせたらんは、おとなしく聞えなまし。

人は未だ聞き及ばぬ事を、わが知りたるまゝに、「さても其の人の事の淺ましさ」などばかりいひやりたれば、「如何なる事のあるにか」と、おし返し問ひにやるこそ心づきなけれ。　世にふりぬる事をも、おのづから聞きもらすあたりもあれば、覺束なからぬやうに告げやりたらん、あしかるべき事かは。

かやうの事は、ものなれぬ人のある事なり。

萬づの咎あらじと思はば、何事にも誠ありて、人を分かず、うやうやしく、言葉すくなからんには如かじ。　男女・老少、皆さる

人こそよけれども、殊に、若くかたちよき人のことうるはしきは、忘れがたく思ひつかるゝものなり。

萬づの咎は、馴れたるさまに上手めき、所得たるけしきして、人をないがしろにするにあり。

家居のつきづきしく、あらまほしきこそ、かりの宿りとは思へど、興あるものなれ。

よき人ののどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、ひときはしみじみと見ゆるぞかし。　今めかしく、きらゝかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子・透垣のたよりをかしく、うちある調度も、むかし覺えてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。

後德大寺の大臣　左大臣藤原實定
歌人　建久二年（一八五一）歿年五十三
綾小路宮　性惠法親王　龜山天皇の皇子
小坂殿　妙法院　當時現京都市東山區内、建仁寺の北に在つた天台宗の名刹

多くの匠（たくみ）の心を盡くしてみがきたて、唐の、大和の、めづらしく、えならぬ調度どもならべおき、前栽の草木まで心のまゝならず作りなせるは、見る目もくるしく、いとわびし。さてもやはながらへ住むべき。又、時のまの煙ともなりなんとぞ、うち見るよりも思はるゝ。大方は、家居にこそ、ことざまはおしはからるれ。

後德大寺の大臣（おとゞ）の、寢殿に鳶ゐさせじとて繩をはられたりけるを、西行が見て、「鳶のゐたらんは、何かはくるしかるべき。此の殿の御心、さばかりにこそ」とて、その後は參らざりけると聞き侍るに、綾小路宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや繩をひかれたりしかば、かのためし思ひ出でられ侍りしに、誠や、「烏の群れゐて、池の蛙をとりければ、御覽じ悲しませ給ひてな

徒然草　二卷　吉野時代に成つた隨筆

ん」と、人の語りしこそ、さてはいみじくこそと覺えしが。德大寺にも、如何なる故か侍りけん。

屏風・障子などの繪も文字も、かたくなる筆やうして書きたるが見にくきよりも、宿のあるじのつたなく覺ゆるなり。

大方、持てる調度にても、心おとりせらるゝことはありぬべし。さのみよき物を持つべしとにもあらず。損ぜざらんためとて、しなく、見にくきさまにしなし、めづらしからんとて、用なき事どもしそへ、わづらはしく好みなせるを言ふなり。古めかしきやうにて、いたくことゞ〳〵しからず、費えもなくて物がらのよきがよきなり。

（徒然草）

松尾芭蕉　名は宗房　俳人　蕉風俳諧の祖　伊賀國（三重縣）の人　元祿七年（一三五四）歿　年五十一

芳野　吉野山　二〇頁參照

廬山　現中華民國江西省九江縣に在る名山

西上人　西行法師

とく〳〵の清水　吉野山中の西行庵附近に在る清水

一四　苔清水

松尾芭蕉

獨り芳野の奥にたどりけるに、まことに山深く、白雲峯に重なり、煙雨谷を埋めて、山賤の家處々に小さく、西に木を伐る音東に響き、院々の鐘の聲は心の底にこたふ。昔より、此の山に入りて世を忘れたる人の多くは、詩にのがれ、歌にかくる。いでや唐土の廬山といはんも亦むべならずや。

ある坊に一夜をかりて、

砧打ちて我に聞かせよや坊が妻

西上人の草の庵の跡は、奥の院より右の方、二町ばかり分け入るほど、柴人の通ふ路のみ僅かにありて、さがしき谷を隔て

伯夷　支那殷代の義人　殷が亡んだ後周の粟を食むを恥ぢ弟叔齊と共に首陽山に隱れ遂に餓死した

許由　支那堯代の高士　帝堯が位を讓らうといふを聞き汚れたとて耳を洗つた

後醍醐帝の御陵　塔尾陵　現奈良縣吉野郡吉野町に在る

野ざらし紀行　一冊　俳諧紀行　貞享二年（二三四五）成る

たる、いと尊し。

かのとく〳〵の清水は、昔にかはらずと見えて、今もとくとくと雫落ちける。

露とく〳〵こゝろみに浮世すゝがばや

若し是、扶桑に伯夷あらば、必ず口をすゝがん。若し是、許由に告げば、耳を洗はん。

山を上り、坂を下るに、秋の日既に斜になれば、名ある處々見殘して、先づ後醍醐帝の御陵を拜む。

御廟年を經て忍ぶは何をしのぶ草

（野ざらし紀行）

阿部次郎
哲學者
東北帝國大學
教授
明治十六年生

一五　深穩

阿部次郎

深穩とは何であるか。それは、穩かさといふ一つの性質が、その程度を深めて行つたもの、換言すれば、非常に穩かなことを意味する言葉であるか。それとも、又、深さ竝びに穩かさ、卽ち深さと穩かさと二つのものが竝存することを意味する言葉であるか。恐らく、それは兩者のいづれでもない。深穩とは、一種特別な穩かさである。深みのある穩かさである。深みによつてその性質に特殊な風格を帶びるに至つた穩かさである。深穩の境地に到達するに至つて、穩かさは、「風波のないこと」「他と衝突せぬこと」「氣骨と圭角とを缺くこと」――約言すれば、墮落せる意味のいはゆる圓滿といふやうな消極的規

田能村竹田
名は孝憲
畫家
豐後國（大分縣）の人
天保六年（一四九五）歿
年五十九
山中人饒舌
二卷
畫道隨筆
天保六年刊

定を脫却して、內心の落著から放射するおのづからなる柔らかさ、煦々たる好日のやうな靜かなる輝きを意味することになるであらう。それは、潑剌たるものが豐かに自由に內心に動きながら、それが奧深きところにおのづからなる纏りを持つてゐるが故に、他に對しても亦、靜かに柔らかに角立たぬ印象を與へるのである。私は、深穩といふ言葉をかういふ意味に解釋する。

私が深穩といふ言葉に最初に注目したのは、田能村竹田の「山中人饒舌」を讀んだ時である。その漢文を書き下しにすれば、彼は、この畫論の末尾に近く、かういつてゐる。

本邦人性輕疾、西土人（支那人）性遲緩、氣稟固より既に同じからず。故に、學者これを精察熟慮して、靜以て心を養ひ、

董巨　董源と巨然共に支那宋代の畫家山水畫の名手

健以て腕を運らし、筆力深穩、墨氣沈厚、以て斯藝に遊ぶべきなり。若し、或は然らざれば、則ち硯を磨して屢〻破り、筆を埋めて塚を作り、董巨の閫奥を覗はんと欲するも、豈能く得べけんや。

私は、この文章に於ける竹田の支那崇拜に拘泥する必要を感じなかつた。これを、畫論の範圍に限られるものと解する氣もなかつた。私は、直ちに、竹田の畫論の根柢になつてゐる心法の意味に於て、これを理解した。さうして、久しく自分の心のうちにあつてしかも表現の途を知らなかつた理想に、簡潔な言葉を與へられたことに隨喜した。深穩は、人が生きてゆく主觀的態度一般の問題である。故に、それは又繪畫の中にも現れて、これを墮落せる意味の遊戯、若しくは宣傳と煽動

杜甫　字は子美、唐代の詩人　皇紀一四三〇年歿　年五十九

唐　支那の國號　皇紀一二七八―一五六七年

とを意味する手段以上のものとしてゐるのである。筆力の深穩と墨氣の沈厚とは、凡そ深穩と沈厚とを必要とする人類の幸福に寄與する、それ自身に意味ある事業の一つでなければならぬ。

私は又、杜甫の詩の中に深穩といふ言葉を發見した。それは「韋諷錄事宅觀曹將軍畫馬圖引」と題する古詩の一節である。詩人は、この詩によつて、描かれたる九匹の馬を讃美する。さうして、「可憐九馬爭神駿。顧視清高氣深穩」といつてゐるのである。私は、この句によつて唐代の文化を思ふ。それは、和戰兩樣の意味に於て全東洋的になつた廣い世界である。さうして、馬はこの世界的交通に於ける重要な用具として、精細に觀察せられ、藝術的に深愛せられる。さうして、繪畫や彫刻の

優れた馬に對して、文學の方面に於ても亦このやうな神に徹したその描寫を見るのである。それは、おとなしい駄馬ではない。それは、戰馬である。「此皆騎戰一敵萬。縞素漠々開風沙。」神駿こそ彼等の本領である。さうして、眼つきの清高と氣象の深穩とが、まさに彼等の神駿の根本條件となつてゐるのである。深穩は、こゝに劇烈な緊張せる活動との相關に於て見られる。內に氣象の深穩を缺くものは、風沙漠々たる間に馳驅する名馬となるの資格を缺くのである。

如何にもして、深穩の境地に近づきたい。深穩の氣象を以て與へられたるものをうけ、課せられたる苦痛に堪へ、新しき世界の創造に精根を盡くし得る者となりたい。

（秋窓記）

一六　俚諺論

大西祝

大西祝
哲學者
文學博士
明治三十三年
歿　年三十六
エピグラム
小諷詩
警句を以て成る短言の詩

羅馬の一詩人が、エピグラムを蜜蜂に譬へて、「螫あり、蜜あり、軀は小さし」と云へるは、總べての俚諺にとは云ひ難からんも、其の最も巧妙なるものには恰當の語なるべし。俚諺の上乘なるものは、多くは此の三者を具ふ。言短くして意義味はふべく、寸鐵人を刺すの妙あり。

俚諺は人口に膾炙し易からんことを求むる故に、おのづから律語を爲す傾向あり。我が國語にては、五七又は七五が其の自らなる律呂なれば、俚諺には此の律に從へるもの甚だ多し。「雉子も鳴かずばうたれまい」「心の鬼が身を責める」と云ふが如き、最もよく人口に膾炙せるものにして、七五の調子をな

せるはいと多し。「人と屏風はすぐには立たぬ」「おもふ念力岩をも通す」「身を捨ててこそ浮かむ瀬もあれ」などは、七七の調子をなして語呂頗るよし。「十で神童、十五で才子、二十過ぎては只の人」と云ふも、其の語に律あり。又「多勢に無勢」「短氣は損氣」「弱り目に祟り目」「所かはれば品かはる」「勝つて兜の緒をしめよ」と云ふが如く、同語又は同韻を重ねたるたぐひのものも少からず。

俚諺はかく律を成し、尾韻又は頭韻を合はするのみならず、多くは具象的に言ひ做して感動の強からんことを求め、これが爲にしば〳〵誇張の言を喜ぶことあるは、詩歌に似たる點なり。此の故に、諺には、物の度量を言ふにも、其の數又は量を定めて言ふを好む。「七度搜して人を疑へ」「人の噂も七十五日」「預り物は半分の主」などの類は數ふるに遑あらず。數の中にても、最も好んで用ゐらるゝは三の數なるべし。「三度目が定の目」「三年たてば三つになる」「懺悔話をすれば三年の罪がほろびる」「三人よれば文殊の智慧」「三人よれば人中」「二度あることは三度ある」「朝起は三文のとく」「石の上にも三年居ればあたゝまる」「其の他猶多くあるべし。「用心は臆病にせよ」「黑犬に食はれて灰の和滓(たれかす)におそれる」などは、誇張によりて其の意味を成せるものの例なるべし。

誇張を喜ぶと同じ理由を以て、俚諺は一見まことしやかならぬ語句、卽ちパラドックスを喜ぶ。「急がばまはれ」「言はぬは言ふにまさる」「逢ふは別れのはじめ」「論語よみの論語しらず」「人を使ふは使はれる」など、其の例なるべし。かく相反するが如

き事柄の中に、却つて相通ずる所あるを發見するは、深邃なる智慧の一特徴なり。

パラドックスと云ふにはあらずとも、總じて反對のものを列ぶるは吾人の注意を捉ふる一方便なり。俚諺は總じて對照を喜ぶ。「骨折損の草臥まうけ」「聞いて極樂、見て地獄」「問ふは一旦の恥、問はぬは一生の恥」「長者の萬燈より貧者の一燈」などは其の例なり。

反對を置くのみならず、總じて二種の事柄を列べてそを比照するは、俚諺の一大特色なり。是、俚諺の比喩に富める所以にして、其の比喩の極めて妙なる、詩人の作としても恥づかしからぬものあり。俚諺の最も巧妙なるものは、多く此の類に屬す。「旅は道づれ、世はなさけ」と云ふ如きは、幾たび唱するも

其の趣味の津々たるを覺ゆ。「花は櫻木人は武士」、是、我が國民の、以てそが理想を誇るに足るものの一なるべし。「佛法と藁屋の雨は出でて聞け」、風流の心に富める國民ならで、誰かこれをえ言ひ出でん。これを口ずさみ見よ、如何に詩心・道心・宗教心の相結びてなせる高雅・幽玄なる妙趣の浮かび來るぞ。

かく二つの事を列べて相比照することなく、所謂暗喩を用ゐたるものも頗る多し。「蟹は甲に似せて穴をほる」「目くそ鼻くそを嗤ふ」と云ふ如きは此の例なり。又、巧みに隱喩を用ゐたるも多し。例へば、「商賣は牛のよだれ」「得手に帆をあげる」と云ふが如し。かく、比喩の用法は種々あれども、寓言に於けるそれとは同じからず。寓言は敍事の體裁を具へ、俚諺は然らず。同じく意を寓して比喩を用ゐるも、寓言はこれを出來事

又は動作として語り、俚諺はこれを時間に結ばずして常恆の事實として語る。

以上は、俚諺が其の言ひ表しの仕方に於て詩句に似たる所あるを言へるなれど、唯其の形に於て然るのみならず、其の想に於ても詩趣を具ふるものの尠からぬは、上掲の諸例に於ても既に認知し得し所ならん。

一國民の言ひ慣れたる俚諺の內容を深く研究すれば、其の國民の歷史・氣質・風俗・人情・學術・宗教・社會制度等、其の一切の生活と其の生活の理想とに就いて發見する所多々あるべし。此の點に於て、諸國民の俚諺を比較するはいと興味あることなり。我が俚諺の中、今卽座に想ひ出づるもの三四を掲げんに、上に引ける「花は櫻木人は武士」と云ふ美しき諺は言ふも更

なり「武士は食はねど高楊枝」「武士は相見互」と云ふ如きは、我が國の歷史に大光彩を放てる、武士と云ふ階級の理想を窺ふに足るべく、又これによりて、此の如き理想を愛重したりし全國民の氣風を察し得べし。「泣く子と地頭には勝たれぬ」と云ふをみば、千萬言の歷史的敍述に劣らず、我が國の歷史の或時代に於ける地頭といふものの勢力を察知し得べく、「女に家なし」貞女兩夫にまみえず」などは、我が國特有の諺とは云ふべからざるも、以て婦女子に關する我が社會制度の一面を窺ふに足るべく、「嫁が姑になる」「老いては子に從へ」と云へば、家族制度を示す所あり。又「さはらぬ神に祟なし」「棄てる神あれば助ける神あり」「神は正直のかうべにやどる」「窮した時の神だのみ」などは宗教思想を示すべく、「袖振り合ふも他生の緣」と云へば、以て

佛教によりて養はれたる因果思想を見るに足るべし。これらは唯念頭に浮かびたるまゝ數種の例を掲げたるに過ぎず。

歐洲諸國の諺には夫婦の關係を言へるもの甚だ多く、我が國の諺には寧ろ親子の關係を言へるもの多きが如し。「親の心子知らず」「子を知るもの親にしくはなし」「子ゆゑの闇にまよふ」「孝行したい時に親はない」「かはいゝ子には旅をさせよ」「子は三界の首枷」「子が思ふよりは親は百倍に思ふ」と云ふなど、親の慈を言ふや至れり盡くせり。其の上に「子よりも孫はかはいい」と云へる、何の言か能くこれにまさりて子孫の愛のこまやかなることを言ひ表し得るものぞ。かく親の慈愛を稱ふると云ふものから、俚諺はまた能く人情の他面を言ふ。「子棄つる藪あれども身棄つる藪なし」とは、何ぞ能く吾人の主我心を言ひ穿てる。

俚諺は事の一面を見て、これを誇張して言ふの傾あるものから、其の他面を言ふに躊躇せざるが故に、一見其の判斷の相反するが如く思はるゝものあれど、かく兩面より言ふところ、能く世態人情の實相にかなひて、其の判斷概ね公平なり。「好きこそ物の上手なれ」と云へど、「下手の横ずき」と云ふを忘れず、「親に似ぬは鬼子」と云へば、「形生めども心は生まず」と云ふ。かく事の兩面を叩いて世相の內祕、人情の裏面を穿たんと力むる、是卽ち俚諺が警戒と諷刺とに富める所以にして、中には一言能く人情の裏面を訐きて巧みに罵倒し了するものあり。

（大西博士全集第七卷）

萩原朔太郎
詩人
明治二十一年生

一七　詩の鑑賞

萩原朔太郎

絲車、絲車、しづかにふかき手の紡、
その絲車やはらかにめぐる夕ぞわりなけれ。
金と赤との南瓜のふたつ轉がる板の間に、
「共同醫館」の板の間に、
ひとり坐りし留守番の、その媼こそさみしけれ。

耳も聞えず、眼も見えず、かくて五月となりぬれば、
微かに匂ふ綿くづのそのほこりこそゆかしけれ。
硝子戸棚に白骨のひとり立てるも珍かに、
水路のほとり月光の斜に射すもしをらしや。

北原白秋
名は隆吉
詩人　歌人
明治十八年生
思ひ出
白秋の第二詩集
明治四十四年刊

絲車、絲車、しづかに默す手の紡、
その物思やはらかにめぐる夕ぞわりなけれ。

これは、北原白秋氏の詩集「思ひ出」の中にある「絲車」と題する詩である。

この詩の表現しようとしてゐるものは、一つの幻想的な、官能の夢の中に漂ふ仄かな淡い悲しみである。ところで、言語は、さうした「官能の夢」を語り得ない。それを語り得るものは、世界にたゞ音樂あるのみである。そこで詩人は、かうした場合に、音樂家に變つてしまふ。即ち、その使用する言葉を、そのまゝ樂器に變へてしまふのである。如何にせば言葉を樂器

に變へ得るか。詩作上に於けるこの最も重要な技巧を知らうとするものは、先づこの詩について學ぶがよい。

「絲車、絲車、しづかにふかき手の紡、」先づ冒頭の一行を讀め。默讀でもよいから、靜かに繰返して讀んで見給へ。何といふ落著いた、靜かな、美しい音樂であらう。「絲車、絲車」と二つ言葉を重ねたのは、車の廻轉する感じを現すためであり、最も有效に使用されてゐる。次の「しづかにふかき手の紡」で、「ふかき」と「紡」との間に於ける、音韻の微妙な中和性を味はつてみる必要がある。それがちやうど、絲車の音もなく靜かに廻つてゐる柔らかい感じを現してゐるのである。これがもし、「しづかにふかき」でなく、「しづかに廻す」であつたとしたら、到底かうした美しい音樂は構成されない。詩作する場合には、何よりも先づ、かうした音樂の構成に注意し、一語々々の音韻に注意することが肝要である。

「その絲車やはらかにめぐる夕ぞわりなけれ」で、前の行を受け、詩の第一節が終つてゐる。こゝまで讀み續けて來ると、あたかも、黃昏の物侘びしい世界の中で、音もなく靜かに廻つてゐる絲車の響が、仄かな心の耳に聞えて來る感じがする。そして、こゝまでは、人間もなく景物もなく、どこか知れない宇宙の中で、たゞ絲車だけが獨りで廻つてゐるのである。次の行に移つてから、始めてそれの空間的所在が明示されて來る。卽ち、それは、「金と赤との南瓜のふたつ轉がる『共同醫館』の板の間に、ひとり坐りし留守番の媼」が廻してゐる絲車なのである。かくの如く、初にぼんやりと絲車を出し、次ぎにその位置や所、

在を明示するのは、漠然たる夢の印象を初に強く感じさせ、後に次第に現實を見せるための手法であつて、かうした象徴的な詩の構成上では、最も有效に用ゐられる技術である。

さて、こゝで「金と赤との南瓜」を點景したのは、奇想天外の著想であり、且如何にも白秋氏らしい技巧である。前の二行を讀み終つて、靜かな黄昏のやうな情緒に浸つてゐる讀者は、この奇警な南瓜にぶつかつて、急に眠から覺されたやうに喫驚させられる。詩に於けるこの「不意打」は、白秋氏ばかりでなく、多くの詩人の好んで用ゐる手法であつて、詩の單調を破り、變化と刺戟とを與へるために、最も有效な手段である。詩もやはり戰術と同じく、常に讀者の豫期しない意想外の隙をねらつて、一時敵をまごつかせ、混亂に陷らせる工夫が時として必

要である。しかし、その混亂は、後の行の進行と共に、直ちにまた整理され、安靜の狀態に引きもどされるやう、十分に用意された不意打でなければならない。白秋氏の詩の場合では、この「金と赤」とが彩どつてゐる蜥蜴のやうな感覺を、詩の表象してゐる官能の世界の中で、仄かに這ひ歩く神祕な物影に漂はしてゐる。そして、この巧妙な手品の種は、後にだん〳〵と解つてくる。

こゝでまた、「共同醫館」といふ表象を配景したのは、ある田舍風の、臺所などの廣くひつそりとした、物侘びしい、古い醫院を思はせるためである。つまり、「共同醫館」といふ言葉の中に、あまり患者の來ない、田舍の古く寂びれた醫院を思はせるやうな聯想があるからで、詩を作る人たちは、かうした言葉の聯想

性に對して敏感でなければならない。その薄暗く、侘びしく、ひつそりとした共同醫館の臺所に、留守番の老婆が、獨りで音もなく絲車を廻してゐる。その臺所の暗い隅には、永遠の靜物のやうに、南瓜が二つ轉がつてゐる。すべてが靜かに沈默して、黃昏のやうな情趣をもつた詩境である。

第二聯に移つて、「耳も聞えず、眼も見えず」の次ぎに、「かくて五月となりぬれば」と續け、こゝで急に調子を變へて高くしてゐる。この轉調も亦、讀者にとつて不意打である。「耳も聞えず、眼も見えず」の沈んだ陰氣な詩句に續けて、不意に、「やがて五月となりぬれば」の朗々とした明かるい調子が、大洋の浪のやうに急に盛り上つて來ようとは、誰にも豫期出來ないことである。だが、この不意打は、何といふ心地よい不意打だらう。前の陰氣な詩句を受けて、心が低く沈んでゐるところへ、急にこの海潮音のやうな、五月の薰風のやうな詩句が出るので、一時にさつと胸がひらけて、心が自ら青空高く飛翔して來る。實に、詩の魅力たる所以の不思議がこゝにあるので、音樂をもたない散文では、到底この樂しい魔法は使へないのである。

次行に移つて、「微かに匂ふ綿くづのそのほこりこそゆかしけれ」は、前行の五月を受け、初夏新綠の頃の明かるい空氣を、官能のちらばふ綿くづの影に匂はせたのである。「硝子戸棚に白骨のひとり立てるも珍かに」と、こゝで「白骨」を出したのは、醫者の家であるから當然の話であるが、詩の構成上からみれば、硝子戸棚と共に、ある冷たい、空氣のひえ〴〵とした感覺を匂はせるための手法である。そして、尙この「白骨」は、第一聯の「金

と赤との南瓜」に於ける色彩の刺戟的な表象と對照して、詩の背後に或漂渺とした神祕的な夢を影づけてゐる。そこで、次行の「水路のほとり月光の斜に射すもしをらしや」が、前行の冷たい空氣の感覺を受けつぎながら、同時にまたその銀色の月光で、詩境の背後にある神祕の夢を照らさせるべく、巧みに用意深く構成されてゐるのである。

詩がこゝまで進んで來た時、もはや老婆の影は何處かに消えて無くなつてゐる。この詩の表象しようと意志したものは、絲車を繰る老婆の姿ではなくして、その主題の音樂が象徴するところの、或漂渺とした、言葉では捕捉出來ない、一つの純官能的な表象なのである。故に、詩の最後になつては、老婆も、南瓜も、臺所も、共同醫館も、すべて皆何處かへ消えて無くなつてしまつてゐる。そしてたゞ「絲車、絲車、しづかに默す手の紡、その物思やはらかにめぐる夕ぞわりなけれ」の主題だけが、再度また、最初のやうに、どこかの時空の中から夢のやうに聞えて來る。かくて首尾相合し、詩が完全に終つてゐるのであつて、實にこの詩の如きは、構成上に於ても、技巧上に於ても、名人の至藝を盡くした名作である。讀者は百の駄詩をいたづらに讀むよりは、かうした名作一篇を研究して、よろしく自得すべきである。

（純正詩論）

佐藤春夫
詩人　小說家
和歌山縣の人
明治二十五年生

木の國
紀の國
紀伊國
現和歌山・三重兩縣の內
牟婁
和歌山縣東・西牟婁郡及び三重縣南・北牟婁郡の地

一八　望鄉五月歌

佐藤春夫

塵まみれなる街路樹に
哀れなる五月來にけり。
石だたみ都大路を歩みつつ、
戀ひしきや何ぞわが古里。
あさもよし木の國の
牟婁の海山、
夏みかんたわわに實のり、
橘の花さくなべに
とよもして啼くほととぎす、

心して、な散らしそかのよき花を。
朝霧か、若かりし日の
わが夢ぞ
そこに狹霧らふ。
朝雲か、望鄉の
わが心
そこにいさよふ。
空青し、山青し、海青し。
日はかがやかに
南國の五月晴こそゆたかなれ。
心も輕くうれしきに、

海の原見はるかすとて
のぼり行く山邊の徑は、
杉・檜・樟の芽吹の
花よりもいみじく匂ひ、
かぐはしき木の香薫じぬ。
のぼり行く徑いくまがり、
しづかにも昇る煙の
見まがふや香爐の煙、
山賤が吸ひのこしたる
鄙ぶりの山の煙草の
椿の葉焦げて落ちたり。

古への帝王たちも通はせし
尾の上の徑は果を無み、
ただつれづれに
通ふべききはにあらねば、
目を上げてただに望みて
いそのかみふるき昔をしのびつつ
そぞろにも山を降りぬ。
歌まくら塵の世をはなれ小島に
立ち騒ぐ波もや見むと
辿り行く荒磯石原、
丹塗舟影濃きあたり

若者の憩へるあらば、
海の幸鯨捕る船の話も聞くべかり。
且は聽け、
浦の濱木綿百重なす松の下かげ。
いざさらば、
心ゆく今日のかたみに、
荒海の八重の潮路を運ばれて
流れよる千種百種
貝がらの數を蒐めて歌にそへ
贈らばや都の子等に。

〔出所〕春夫詩鈔

平福百穂
名は貞藏
畫家　歌人
東京美術學校教授
帝國美術院會員
昭和八年歿
年五十七

雪舟
名は等楊
俗姓小田
畫僧
永正三年（一五〇六）歿
年八十七

馬遠
夏珪
共に支那南宋代の畫家

一九　寫生と傳統

平福百穂

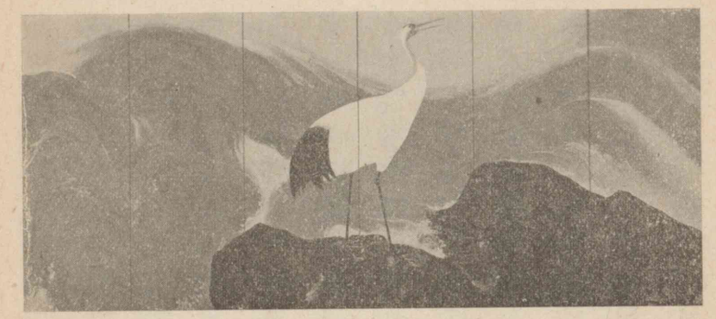
雪舟が人に畫の注意を書いてやつたと傳へられるものに、「山水の趣は、木立物古り、遙かに幽微なるがよく候。筆輕に、馬遠・夏珪などの筆の跡をもととして御學び候が、第一の御稽古にて候。唯別、物に似るを畫とせずと古人も申し置かれ候へども、皆目前の景色、畫の師にて候」とある。

雪舟のこの注意は、二つの要點に分かれる。一つは、古へに學ぶことであり、他は、自然に學ぶことである。即ち、畫の師は先進と自然との二つである。山水の趣は幽微なるがよく、それには馬遠・夏珪などを師とするがよい。又、畫は形似を主とせずと、古人もいつてゐるが、皆目前の景色は師とすべきであ

丹鶴青瀾

るといふのである。そして、この古へに學ぶとは傳統に就くことである。自然に學ぶとは寫生である。この二つは、別々の如くであつて、しかも別々ではない。隨つて、この二つは、分離しては相互に意味が完結しない。

なぜ、畫では傳統に就く必要があるか。最も獨自性の貴ばれる藝術としての繪畫に、どうして傳統を必要とするか。これは確かに一つの疑問である。しかし、その疑問は、繪畫の本質を吟味すれば、容易に解決される。科學



平福百穂筆

は前人の爲し終つた所から爲し始め、前人の收めた效果に效果を積んでその成績を增大してゆくが、藝術は全人格に立つものであるが故に、前人の爲し始めた所から爲し始めねばならない。

然らば、前人の勝れた藝術を學びさへすれば自己の藝術が完成するかといへば、さうはゆかない。藝術に重要な創造は、たゞ古人の傳統に學ぶのみ、では成立しない。自分を原因として動くものがなければならない。即ち、

大和繪　土佐派を中心とする日本風俗畫
狩野　狩野派　狩野正信を祖とする
圓山　圓山派　圓山應擧を祖とする
南畫　南宗畫　北宗畫の對　支那に起り、我が國では江戸時代中期以後圓山・四條と相竝んで畫壇の中心をなした畫風
池大雅・與謝蕪村等はその大成者

自然に觀入するところがなければならない。何となれば、自然を學ぶとは、單に自然の皮相を模寫することではなく、自然を人格の上に移して、全人格の所有とすることであるからである。

蓋し、傳統はそのまゝでは空虛である。それはたゞ筆墨の末技のみに陷り易い。大和繪や狩野・圓山は固より、南畫に至るまで、末流に於てその弊が著しい。若し、其の中に偉大な作家があつたとすれば、それは前人の爲し始めた出發點と自然觀入とに目覺めたものと斷言してもよい。たま〳〵、單に傳統の末技の上のみに立つて何等かの工夫を加へ、ちよつと人の注意を惹くものもあるが、如上の二つの自覺を缺いたものの仕事は、概ね衆俗を喜ばすものに過ぎない。

然るに、近來、青年日本畫家の行き方は、自らこれと異なつてゐる。この人達の多くは、先づ西洋畫に基づく寫生から入つてゐる。これは、自分達が繪を習ひ始めた時代の方法とは全く異なつてゐる。この差異は、蓋し時代の變化に基づくものであらうと考へられる。今の青年が、その少年時代に於て先づ接する繪畫は、少年雜誌の口繪である。そして、その口繪は、多く西洋畫、或はその教養に基づく畫である。又、教室や家庭に於て描くものも西洋畫の系統である。隨つて、彼等は繪畫といへば、先づ西洋畫を思ひ浮かべる。かくて、その少年が青年となり、繪畫の道を選ぶとすれば、必ず西洋畫か、在來の傳統を全く離れた日本畫かである。全く傳統から自由になつて、自分の眼で自然を觀、感じようとするのである。この傾向に

して極まるならば、日本畫の傳統は消滅すべきであるが、かういふ人々も、二三年乃至五六年にして、何時か傳統を採用するやうに傾いてくる。西洋畫の影響から一轉して、古代に向かふのである。彼等は自然の寫生を續けるに隨つて、傳統の眞の味を知るに至るのである。寫生は、こゝに必然に他の一要素たる傳統を要請し來つたのである。かゝる傾向は又、青年が繪畫を鑑賞する場合にもあらはれる。彼等が先づ理解するのは西洋畫であつて、後漸く日本畫に向かつて來る。

彼等は自然の寫生から入つて、やがて傳統に學ぶが故に、型から入つたもののやうに固定することがない。傳統は、理解に基づいて、自由に新しく研究され、學ばれる。かくて、その寫生は、深い根柢を有する藝術上の教養を背景としたものになるのである。

私が今望む境地は、廣くして靜かな、單純にして綜合的な心の狀態である。そして、これを可能にする道は、自然を通してこの古への心にかへることである。寫生を傳統と區別せず、寫生を傳統に基づけることが、正しい古人の心であり、また近代の心である。

（竹窓小話）

二〇　廣重の畫

內田　實

內田實
廣重研究家
明治六年生

廣重
安藤廣重
號は一立齋
浮世繪畫家
安政五年（一五一八）歿
年六十二

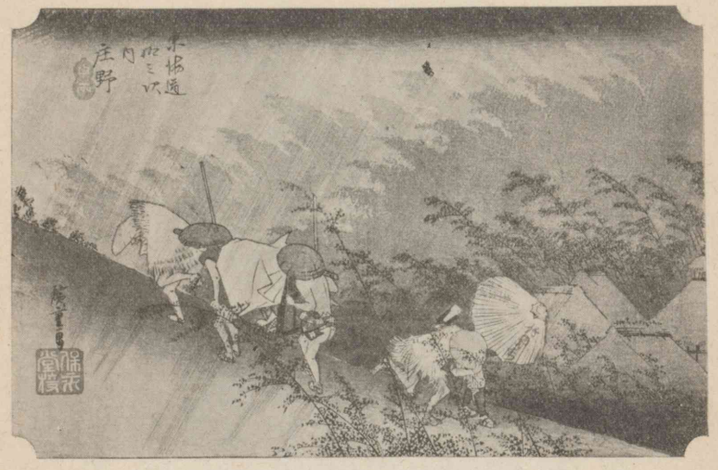
庄野
現三重縣鈴鹿郡庄野村
東海道五十三次の一

庄　野

題して「白雨」といふ。

庄野には藪が多かつた。大しぶきにしぶく夕立の脚、波のやうに搖らぐ竹藪、ふためき走る雨中人物――それ等が各同じ調子を以て活躍してゐるために、全圖に流れる「動」のリズムがよく統一されて、毫末も破綻が無い。うつすりした墨色を基調とし、それに配した路傍の草色は、まさしく夏草に注ぐ夕立の濕りの色調であつて、目に入るもの皆動き、目に入るもの皆濡れてゐる。

爪先あがりの坂路の劃り方は、それと反對の角度に靡いてゐる竹藪の描寫に對して構圖線の妙を極めてゐる。抹と線とを併用した雨脚の取扱もうまい。雨中を飛ばす駕籠の桐油のめくれから、中の客人の拳ばかりを見せ、駕籠の搖らぎに身を固うしてゐるさまを暗示したところは、痛快なほどの細かさである。廣重の雨景畫中、夕立の圖として最上乘のものであることは、云ふまでもあるまい。



亀山
現三重縣鈴鹿郡亀山町
東海道五十三次の一
亀山城
亀山町の北部に在つた今城趾が在る

亀山

亀山城の山脚が、圖の中央を筋違ひに仕切つてゐる。下から登つて行く馬や駕籠が、雪の花を著けた樹々の間に隱見する。頭上の空は深緑に澄み、裾の空は紅の朝日の光に染まつてゐる。白皚々の銀世界、一天晴れ渡つて、その中に山の城壁が屹然と聳え立つたところは、清淨の感じと莊嚴の感じとを與へる。

猿若町
現東京市淺草區猿若町附近
當時芝居町として知られた三座
猿若三座
中村座・市村座・河原崎座

猿若町夜の景

町の兩側に、三座と茶屋とが、掛行燈や長い店提燈を幾つともなくつるして、向かふへ透視畫的に續いてゐる。眞圓な秋の夜の月が光を地上に投げて、道行く人の影を落してゐる。往來には、男衆に送迎される幾組かの客や、素見（ざめき）や、出前持が行き交うてゐる。夜泣饂飩が屋臺を下してゐる。按摩の流しが行く。店先の緣臺に立つた女中が、腰を落して會釋してゐるさまの纖細な描寫振りは、此の圖の興味の上に、よく働いてゐる。

（廣重）

二　花

岡倉覺三

岡倉覺三
號は天心
明治畫壇の先覺者
東京美術學校長
大正二年歿
年五十二

喜にも悲しみにも、花は我々の不斷の友である。花と共に飲み、花と共に食ひ、花と共に歌ひ、花と共に踊る。花を奪はれた世界は考へても恐しい。病める人の枕邊に慰安を齎し、疲れた人々の闇の世界に愉悅の光を齎すものも花ではないか。その明かるい和らかさは、ちやうど愛らしい子供に見とれてゐることが失はれた希望を蘇らせるやうに、宇宙に對する信賴の念を回復してくれる。我々が土に葬られる時我々の墓邊を、悲しみに沈んで低徊するものも花である。

併し、悲しいかな、我々は花を不斷の友としながらも、未だ禽獸の域を脱することあまり遠くないといふ事實を掩ふことは出來ぬ。我々は自己の欲望の外に神聖なものを知らず「己」を至高の偶像としてゐる。そして、この偶像に牲を捧げる爲に自然を荒してゐる。我々は教養と風雅との名に於て、いかなる殘害をも犯さざるはない。

天心先生（下村觀山筆）

星の涙の優しい花よ、園に立つて、日の光や露の玉を讃へて歌ふ蜜蜂に頷いてゐる花よ、お前たちは、お前たちを待ち構へてゐる恐しい運命を知つてゐるか。夏のそよ風に搖られて、さうしてゐられる間は、いつまでも樂しく

夢見心地で暮すがよい。明日にも、無慈悲な手が喉を取卷くだらう。お前はねぢ切られて手足を一つ〳〵もぎ取られ、お前の靜かな家から連れて行かれてしまふだらう。その曲者は、或は絶世の美人であるかも知れぬ。そして、お前の血でその人の指がまだ潤つてゐる間は、「まあ美しい花だこと」といふかも知れぬ。だが、これが果して親切といふものだらうか。

花よ、もしこの國にゐるならば、鋏と小さな鋸とに身を固めた恐しい人にいつ逢ふかも知れぬ。その人は自ら「生花の宗匠」と稱してゐる。彼は、お前たちを剪つて、屈め歪めて、自分のよいと思ふやうにお前たちの取るべき姿勢をきめて、途方もない變な姿にするだらう。その上、彼は醫者の權利を要求する。彼は採療治をする者のやうに、お前たちの筋肉をねぢつたり、骨を違はせたりするだらう。又、出血を止める爲に灼熱した炭でお前たちを焦したり、循環を助ける爲に身體の中へ針金をさし込んだりするであらう。鹽・酢・明礬、時には硫酸を食事に與へることもあらう。お前達は、今にも氣絶しさうな時に、煮え湯を足に注がれることもあらう。彼は、治療を施さない場合に比して、二週間以上も餘計にお前たちの生命を保たせておくことが出來るのを誇とするだらう。

西洋の社會に於て花を無駄にすることは、東洋の宗匠の花の扱ひ方に比べて、一層甚だしいものがある。舞踏室や宴會の席を飾る爲に、日々剪り取られ、翌日は投げ捨てられる花の數は、大したものに違ひない。一つに繋いだら、一大陸を花輪で飾ることも出來よう。このやうに生命そのものを全然顧

慮しないことに比べれば、花の宗匠の罪はまだしも輕い。彼は少くとも、自然の經濟を重んじ、深い慮を以てその犧牲者を選び、死後はその遺骸に敬意を表する。

花を栽培する人の爲には、更に一層肩を持つてやつてもよい。植木鉢の人は、花鋏の人よりも遙かに人情がある。彼が、水や日光に就いて心配したり、寄生蟲を相手に爭つたり、霜を恐れたり、又、芽の出やうが遲いといつては氣を揉み、葉に光澤が出て來たといつては有頂天になる樣を見るのは喜ばしいものである。

併し、鉢植の花の場合でさへ、なほ人間の勝手が感じられる。何故に、花をその故郷から連れ出して、知らぬ他郷に咲かせようとするのであるか。それは、小鳥を籠に閉ぢこめて歌はせようとするのと同じではないか。蘭類が、溫室で人工の熱の爲に息づまる思をしながら、懷かしい南國の空を一目見たいと空しくあがいてゐると、誰が知つてゐよう。

陶淵明　名は潛　支那晉代の文人　皇紀一〇八七　年歿　年六十三

黃昏に云々　疎影橫斜水淸淺　暗香浮動月黃昏　（林和靖）

西湖　現中華民國浙江省杭州の西に在る名湖

林和靖　名は逋　宋代の文人　皇紀一六八八　年歿　年六十二

周茂叔　名は敦頤　宋代の儒者　皇紀一七三三　年歿　年五十七

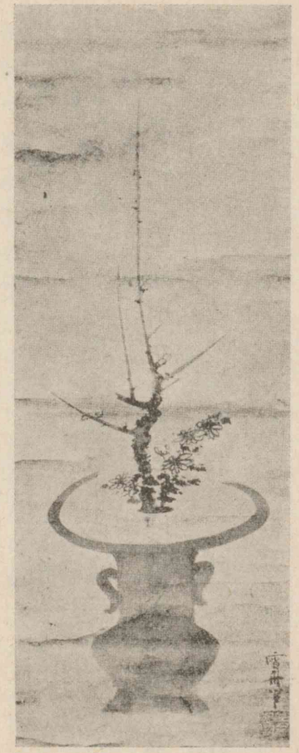
花を理想的に愛する人は、破れた籬の前に坐して菊と語つた陶淵明や、黃昏に西湖の梅花の間を逍遙しながら、暗香浮動の趣に我を忘れた林和靖の如く、花の生まれ故郷に花を訪ねる人々である。周茂叔は、彼の夢が蓮の花の夢と混ずるやうに、舟中に眠つたと傳へられてゐる。

併し、餘りに感傷的になることはやめよう。奢る事を一層戒めつゝ、もつと壯大な氣持にならうではないか。花をちぎることによつて、新な形を生み出して人の心を高めることが出來るならば、さうしてもよいではないか。我々が花に求め

る所は、たゞ美に對する貢獻を共にせんことにある。我々は純潔と清楚とに身を捧げることによつてその罪滅しをしよう。かう云ふ論法で、茶人達は生花の法を定めたのである。

我が茶や花の宗匠の遣り口を知つてゐる人は、彼等が宗教的な尊敬をもつて花を見ることに氣がついたに違ひない。彼等は一枝一條といへども濫りに剪り取ることをせず、己が心に描く藝術的な構圖に照らして注意深く選擇する。彼等は、若し、絶對に必要の度を越えて剪り取るやうなことがあると、これを恥とした。又彼等は多少でも葉があれば、必ずこれを花に添へて生けておく。彼等の目的は花の生活の全美を表すにあるのだから。

茶の宗匠は、花を心ゆくやうに生け終ると、それを床の間に据ゑる。そして、その效果を妨げるやうな物は、一物もその近くには置かない。たとひ一幅の畫でも、その配合に何か特殊な審美的理由がなければならぬ。花はそこに王位についた王子のやうに坐つてゐる。そして客や弟子達は、室に入るや、先づこれに丁寧な御辭儀をしてから、始めて主人に挨拶をする。花が萎れると、宗匠は懇にそれを川に流し、または丁寧に地中に埋める。その靈を弔うて墓碑を建てることさへもある。



生花圖（傳雪舟筆）

石州
片桐石見守貞
昌
號は宗關
石州流茶道の
祖
大和國（奈良
縣）小泉藩主
延寶元年（一
三三三）歿
年六十九

併し、茶人達の花の尊崇は、唯彼等の審美的儀式の一部をなしたに過ぎないのであつて、それだけが獨立して、一つの儀式をなしてゐたのではなかつた。生花は茶室にある他の美術品と同樣に、裝飾の全計畫に從屬するものであつた。故に、石州は、雪が庭に積つてゐる時は、白い梅花を用ゐてはならぬと規定した。騷々しい花は、茶室から遠ざけられた。茶人の生けた生花は、その場所から取去れば、本來の趣旨を失ふものである。といふのは、その線や釣合は、特にその周圍のものとの配合を考へて工夫されてゐるのであるから。

花を花そのものの爲に崇拜することは、十七世紀の中葉に花の宗匠が出るに至つて始つた。今や花は、茶室と獨立に、唯花器が課する法則の他には何等の支配をも受けなくなつた。

狩野派
一三二頁參照
探雪
狩野探雪
畫家
狩野探幽の門
人
正德四年（一
三七四）歿
年六十
常信
狩野常信
畫家
狩野尙信の門
人
正德三年歿
年七十八
浮世繪
江戸時代初期
に起つた風俗
畫
四條派
松村吳春を祖
とする畫派

そして、新しい考案や新しい方法が可能になり、多くの法則や流派がそこから生まれた。江戸時代の末期には、百以上の生花の流派を數へることが出來た。が、概していへば、これ等の諸流は、形式派と寫實派の二大流派に分けられる。形式派は、狩野派に相當する古典的理想主義をねらひ、探雪や常信の花の畫を殆どその儘にうつし出したやうなものであつた。一方寫實派は、その名の示す如く、自然をモデルとして、たゞ藝術的統一の表現に資するやうな形の修正を加へただけである。故に、この派の作には、浮世繪や四條派の畫を成立させてゐると同じ動因が認められる。

併し、私自身としては、花の宗匠の生花よりも茶人の生花に共鳴を感ずる。茶人の花は、適當な位置に据ゑると藝術にな

り、眞に人生と親密な關係を保つが故に我々に訴へるのである。この流派を、寫實派及び形式派と區別して、自然派と呼びたい。茶人達は、花を選擇することで彼等の爲すべきことは終つたと考へて、その他のことは花自らの身の上話に任せた。晩冬の頃茶室に入れば、野の櫻の小枝に蕾の椿を取合はせてあるのを見る。それは、去らんとする冬の名殘と、來らんとする春の豫告とを配合したものである。又、いら〳〵するやうな暑い夏の日に、晝の茶に行つて見れば、床の間の薄暗い涼しい處に懸つてゐる花器に、一輪の百合の花を見るであらう。

花の獨奏も面白いが、繪畫・彫刻との合奏となれば、その取合はせには人を恍惚とさせるものがある。石州は嘗て、湖沼の植物を思はせるやうに水盤に水草を生けて、上の壁には、相阿彌の描いた鴨の空を飛ぶ繪をかけた。紹巴といふ茶人は、漁家と海邊の野花を形どつた青銅の香爐に配するに、海岸の寂びしい美しさを詠んだ和歌を以てした。その客人の一人は、その全配合の中に逝く秋の息吹を感じたと記してゐる。

相阿彌　名は眞相　畫家　茶人　大永五年（一五二一）歿

紹巴　里村紹巴　連歌師　茶人　慶長七年（一六〇二）歿　年七十九

利休　千利休　名は宗易　茶人　天正十九年（一五九一）歿　年七十一

花の物語は盡きないが、もう一つだけ語ることにしよう。桃山時代には、朝顏はまだ我が國では珍しかつた。利休は庭全體にそれを植ゑさせて、丹精こめて栽培した。利休の朝顏の評判が太閤の耳に達すると、太閤はそれを見たいとの所望であつた。そこで利休は、我が家の朝の茶へ招待した。その日になつて、太閤は庭中を歩いて見たが、何處にも朝顏の跡形も見えなかつた。地面は、ならして、美しい小石や砂利を敷いてあつた。太閤はむつとした樣子で茶室へはひつた。併し

吉野　二〇頁參照
嵐山　現京都市右京區に在る櫻花・紅葉の名所

そこには眼のさめるやうな見ものが待つてゐて、彼の機嫌はすつかりなほつてしまつた。床の間には、宋細工の珍しい青銅の器に、全庭園の女王である一輪の朝顔が生けてあつた。

かういふ例を見ると、花御供の意味がよく分かる。多分花もその意味を十分に諒としてゐるであらう。彼等は卑怯者ではない。花によつては、死を誇とするものもある。櫻花の如きは、惜しげなく風に身を任せて散りゆく時、これを誇とするものであらう。吉野や嵐山の薫る雪崩の前に立つたことのある人は誰でもきつとさう感じるであらう。寶石をちりばめた雲の如く飛ぶことしばし、また水晶の流れの上に舞ひ、落ちてはさゞめく波の上に身を浮かべて、「いざさらば、春よ、我等は永遠の旅に行く」といふやうである。

（茶の本）

萬葉集　一八頁參照
山城道　山城國（現京都府南部一帶の地）を通つてゐる道

三　山城道

萬葉集卷十三作者未詳の歌に、

つぎねふ　山城道を　他夫の　馬より行くに
己夫し　歩より行けば　見るごとに　ねのみし泣かゆ　そこ思ふに　心し痛し　たらちねの　母が形見と　わが持たる　まそみ鏡に
蜻蛉領布　負ひ竝めもちて　馬かへわが背

といふのがあつて、これを味はふ度に深い感動を覺える。

夫は今、遠い道を山城に向かつて行かうとしてゐる。途中には山越えもあれば川越しもある。人々は皆馬の脊に跨がつて出かけるのに、馬を持たぬわが夫は徒歩で行かねばならぬ

ぬ。我が夫の徒歩姿を見ては、じつとしてゐられない。女ながらも、何とかして役に立つことは出來ないものであらうか。しかし、貧しい平生の生活に貯などのあらう筈もない。やがて、母の形見として祕めつゝ所持してゐる明鏡と薄物の領布とがあるのを想ひ起した。さうだ、あれは私にとつては生涯身を離すまいと思つた大事な記念の品ではあるが、今の場合、これを以て急場の役目を果さう。――かうして、母の記念であり、女の魂である鏡さへ、惜し氣もなく捧げようとしたのである。思へば、まことに眞情の籠つた作である。無垢そのもののやうな心根のあらはれた歌である。惻々として人に迫るのは、その眞情のため、その無垢な心のためである。

かうした妻の眞情に接した夫は、またその夫らしい眞情を

以てこれに答へてゐる。

馬買はば妹歩行ならむよしゑやし石は履むとも吾は二人行かむ

妻の眞情は身に沁みて嬉しいけれども、自分だけが馬に乗り、妻ひとり歩かせることは忍びない。たとひどのやうに險しい道であらうとも、お互に助け合ひ勞り合つて踏み越えようといふのである。

夫を思ふ心と妻をいとほしむ心とが、清く溫かく響き合つた歌である。己を棄てて、夫を思ひ妻を慈しむ心こそ、眞に何物にもかへがたいこの世の寶である。この貧しい夫妻の間に見出される眞情が、時の古今を問はず人に迫るのである。

柳田國男
民間傳承研究家
元貴族院書記官長
明治八年生

二三　爐の火

柳田國男

火の最も原始的なる魅惑力は、炎であり、光であつた。子供などは何の用も無い場合にも、物を燃やして突如として咲く花のあでやかさを賞翫しようとした。暗黑の不安を追ひ拂ふ爲には、跳ねてぱち〳〵と音を立てるやうな、豆がら・馬醉木の類をまじへて焚く必要さへ認められた。

必ずしも巖窟の穴の奥に隱れた大昔に限らず、家を建て、簾を垂れて住み始めてからずつと後まで、窓は出來るだけ高く小さく、戸を閉ぢ、壁を塞いで、雨であれ、風であれ、あらゆる外から來るものを總括して、畏れ、且防衞してゐた世の中に於ては、爐の火は誠にたゞ一つの家の中の光明であつた。

月は漏れ云々
月はもれ雨は
たまれと思ふ
にはしづがふ
せやを葺きぞ
わづらふ
（撰集抄）

月は漏れ、雨は漏るなと古歌にもある通り、耀く青空の光ばかりを内に迎へ入れる方法は、以前には無かつたのである。それが、今日のやうに、どの室も明かるく、最早爐の火に炎と光明とを仰ぐことを必要とせぬまでになつたのは、單なる人間の智慮・分別といはんよりも、寧ろ具體的に、紙の力、あかり障子の功勞といつた方が當つてゐる。

其の後、紙は追々に硝子に取つて代られ、終には日中の電氣燈とまで進んで來て、人は如何なる地下室の底ででも働き得るやうになつたのであるが、それは必ずしも結構なことのみでないかも知れぬ。たゞ、少くとも、數千年來の火の光を斷念し、嘗ては荒神樣とまで尊信畏服してゐたものを、今日の如く自由自在に制御するやうになつたのは、何といつても新なる

事業であり、又自信ある勇氣の獲物であつた。

人間が家を持ち、家族といふものを引纏め得たのは、火の發見の結果といつてよろしい。光と溫度と食物との一大中心としての圍爐裏といふものが若し無かつたならば、到底今見るやうな家庭及び社會は出來上らなかつたらう。民の竈といひ、若しくは、戸數を何十何煙といつて數へたのも、實は一家の内に火を焚く場所が、たゞ一つしか無かつたことを意味するのである。

其の火の管理者を、日本では「あるじ」と名づけ、後には旦那殿とも稱した。さうして、其の管理權の所在を具體化したものが、爐の横座であつた。横座とはいつても、それは正面の席であつて、事實は其の左右の敷物が何れも縱に連なつてゐるのに對して、家長の座だけは横疊に敷いてある故に、さういふ名前が古くから生じてゐたのである。

圍爐裏

通例は、向かつて爐の右手、即ち横座から左になる一側を、茶飲座、腰元又は勝手などとも呼んでゐる。其の最も横座に接近した席は、當然に主婦に專屬した。「へら」即ち飯匙は其の權力の象徴であり、食物の分配はたゞ「へら取」即ち「おかた殿」のみの掌る所であつた。

茶飲座と相對する他の一側が客座である。こゝにも席次があつて、最も款待せらるべき者が、一番横座の右近くに坐つた。それから、殘りの今一側の爐端が、下座、下郎座又は木尻である。「嫁は木尻筋から貰へ」といふ諺などもあつて、一段と身分の低いものの座席である。本來は薪の尻を其の方へ向けて置く故の名であつた。煙いのを我慢すべき、居心地のよくない座であつた。

さてこれほどまでに秩序を正して、家には一つしか火の中心を作らぬやうに努めたのであるが、人の心の變化は是非無いもので、終に室毎に炬燵を置かねばならぬ時代が來た。最初は年寄などの安住處としたものが、後には息子までが新聞や本を抱へて、自ら獨立を宣するやうになつた。それを後援

したのは紙と硝子の障子、次にはランプ・電氣燈などであつた。

此の炬燵は、火の神の信仰に對して、明白に一つの叛逆であつた。正月松の内に圍爐裏に足を入れると、苗代に鶯が附くなどといつて叱られてゐたのに、炬燵では何の遠慮も無く、足を出してあたつてゐる。しかし、猶知らぬ間に以前からの約束を蹈襲して、火の清濁の差別待遇を承認し、此の火は食物の煮燒きなどには供用せぬことになつてゐた。炬燵の中で手を叩くことを、老人などの非常にいやがる土地が今でもあつて、それを何故かと尋ねて見ても、もう說明し得る者は一人も無いのであるが、手を叩くといふのは、恐らく荒神樣の禮拜を意味し、火の淨からぬ炬燵の中では、其の行爲をさへ嚴戒してゐたのではないかと思ふ。

先年 大正二年

ニューギニー 大洋洲に屬する太平洋諸島中の大島

ボルネオ マレー群島中の大島

火を焚けば話がはずむといふ原因結果は、よほど久しい大昔からの、不思議なる法則であつたらしい。先年和蘭のローレンス博士の一行が、二度目のニューギニー雪山の探檢を企てた時には、色々考へた末に、ボルネオ内地の土人を人夫に連れて行つた。勇敢で、從順で、正直なことは申分無かつたが、ただ一つの缺點は、夜營地で焚火をさせると、火のある間は話をしてゐてどうしても睡らないから、日中に居眠をして困ることであつた。赤道直下の島に生まれた彼等には、通例は火の必要は無い筈であるが、一たび高山に登つて榾火の夜の光に接すると、忽ちにして悠遠なる祖先の感覺が目ざめるのか、特殊の興奮に誘はれずにはゐなかつたのである。

日本に於ても、昔話は冬のものであり、且夜分にするものときまつてゐたのは、本來は必ず圍爐裏に火を燃す時の儀式であつた爲かと思ふ。即ち、横座の主は、家の火の管理者であると同時に、更に先天的に夜話の議長であり、且傳統教育の學校長でもあつたかと思ふのである。そして、此の傳統教育は、今日の人の思ふよりはるかに有力な人間教育であつたらうとも思はれるのである。

（雪國の春）

國語

女子用　卷七　終

昭和十三年七月二十四日印刷
昭和十三年七月二十七日發行
昭和十三年十一月二十四日訂正再版印刷
昭和十三年十一月二十八日訂正再版發行

國語　女子用　全十卷
定價　各冊　金五拾五錢

編輯者　岩波編輯部
發行者　代表者　岩波茂雄　東京市神田區一ツ橋二丁目三番地　岩波茂雄
印刷者　東京市神田區錦町三丁目十一番地　白井赫太郎
精興社印刷

版權所有

發行所　東京市神田區一ツ橋二丁目三番地　岩波書店
電話九段（一八七）一八九・（一八八）八〇番
振替口座東京二六二四〇番

（永井製本）